昭和四十九年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五六六号

川柳塔

新連載・百人一首と川柳・冨士野鞍馬

No. 566

特集・路郎先生の思い出

七月号

えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛

超特撰（化粧ケース入）
一八リットル詰・一、八〇〇円

清酒 日本盛 ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸

HORAI

551

蓬莱商品の目印

アイスキャンデー

あずき・パイン・ミルク・チョコ

ソフトクリーム

バニラ ・ ミックス ・ チョコ

蓬莱

大 阪・なんば

《出張販売》高島屋 そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店

微笑　直原玉青

画娥眉

先日たまたま、上田勇堂師（広徳寺住職）が、「猛虎娥眉ヲ画ク」という言葉をひいて今日の世相を嘆いて居られるのを読んだ。なじみのないこの言葉をいぶかりいぶかり読んでみる。平易に言えば、「虎が化粧をする」という意味だとの事。虎が化粧をすれば、それは虎が虎でなくなるという事。言い換えれば、人間なら本来の人間でなくなってしまうという事。これは大変な事である。けれどもまさに今日の世相そのものであると言うのである。私達の日常生活にもこれがあてはまる事の多いのは悲しい事、本来の自分を失って終って別な自分が立ちはだかってばかりでは何としても恐ろしい事だと言うのである。生々流転の花のいのち、果てしらず流れる水のいのち。句作に専念してる等と、かっこいいことを言いながら、又しても自分を見失いがちな私の姿を、私は恐ろしいものと観るのである。「猛虎娥眉ヲ画ク」とは、私に訓えられた言葉のように思えてくるのである。

鈍感同士打てば響く仲と云う
気まぐれな強情小細工使いわけ
国立劇場だからと気負う客の顔
飛び乗った動悸のままで名古屋過ぎ
裁きが来て足音もせぬ痴話喧嘩

中島生々庵

座右の句

君見たまへ菠薐草が伸びてゐる　（路郎）

私の句

風車素直な廻りようをする

戸田古方

川柳塔七月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

画　娥　眉……中島生々庵…（1）
昭和二年……尼　緑之助…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（三）……（22）
　清　博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原　亮
　鈴木　黄・室山三柳・入江　勇・岡田　甫
川柳塔（同人作品）……中島生々庵選…（4）
水　煙　抄……川村好郎選…（30）
路郎と酒……東野大八…（24）
こわかった路郎先生……戸田古方…（42）
三度笠は、やめときや……不二田一三夫…（45）
秀句鑑賞……（同人吟）……橘高薫風…（37）
　（水煙抄）……西尾栞…（41）
「旅人」以後の麻生路郎作品……（31）……傍島静馬…（27）
百人一首と川柳……（1）……冨士野鞍馬…（38）

昭和二年

尼　緑之助

大正末期は当地方川柳の開花期で、私は青くさい文学少年だったが、その渦中に一と足踏み込んでいた。小さなグループを持ち、「番」その他に投句もした。だが古川柳調のあそびで、川柳は軽べつの部に置いていた。

昭和二年、路郎先生の「川柳雑誌」を手にしたことから私の川柳観は一変した。そして川柳一辺倒に走り出した。

川雑の支部を引き受け、また徴兵検査もこの年、懐旧の念にかられ、当時の「川雑」を探した。

路郎先生との出会いから、その頃の風潮等を書きたいがスペースがない。そこで昭和三年二月号の記事を引用して、わずかながら当時を覗いてみたい。この頃、私自身をひけらかすようで恐縮だが、合評記事を半分程度に縮めて御紹介する。

前号作品「合評」出席者、路郎、葭乃、松郎、紋太（椙元）山雨楼

路郎提出（緑之助句）

いいえ夫婦までとは思うて居りませぬ

生駒から……麻生葭乃…(47)
近作……諸家…(27)
49年度二賞候補作品中間発表……(28)
一分間の柳論……小浜牧人…(44)
東郷元帥と野迷路大人（通信）……本田恵二朗…(46)
学習考……古川鶴声…(58)
雅号ぶっちゃけばなし……岩本具里院…(40)
初歩教室……吹田三郎…(53)
大萬川柳「焦り」……月原宵明…(59)
柳界展望……本田恵二朗…(50)
本社六月句会……川村好郎選…(52)
各地柳壇（佳句地10選）……（庸佑）…(54)
「宵宮」……竹中肖二…(56)
一路集「独立」……和海草春選…(61)
「盆」……若林草右選…(48)
編集後記……川竹松風選…(48)
……（一三夫・葉子）…(49)
……(65)

座右の句

雲の峯という手もありさらばさらばです（路郎）

私の句

睡蓮は万丈光の光源よ

橘高薫風

紋太—困ったネ、賞めたいが、句の意味は？
路郎—二人はいい仲だが、夫婦になりたいほどでもない、女の気持。
松郎—近代的な不良少女、同棲してるだろう
紋太—同棲ではない、恋を享楽している。
路郎—恋を恋してるような女だ。
山雨楼—現在の安価な享楽を諷刺し、背景に思想問題があるのではないか。
松郎—思想を現わしたものではない。
山雨楼—はじめの「いいえ」が妙手だ。
路郎—云い切ったことは古川柳から前進。
山雨楼—選句されたとき訂正はないか。
路郎—この句、この記憶はない。私は特殊の場合をのぞいては殆んど手を入れぬことにしている。訂正するにしても、てにおはを訂正して、句の姿を引き締める位なものだ。作者の匂いを失うようなことはしない。それより潔ぎよく捨ててしまう。それが他日のためになると信じている。

先生の方針は、作者の個性を伸ばすということに一貫していた。（現今でもこの言葉はよく使われるが、真物かどうか）、「人間陶冶の詩」という基本もこの頃出来たもの、そして、数々の異色作家が育った。又何かのことで門を離れた人達にしても、路郎は残っている。巾広い格調と柳魂は全国の隅々に根をおろしているものと信じている。

——以上

ストの日へ押し寄せている交差点
歌いたいのどへ指名が回って来
話してるうちに名前がよみがえり
葬式の席で親戚端と知り
お見舞の病院驚くべき患者

岡山県　浜田久米雄

人妻へドラマはあほな知恵をつけ
恍惚の人へ届いた勲五等
　葵水氏令息結婚
拍手盛ん人生ドラマ二幕目

大阪市　本多柳志

剣の道絵の道同じとこへ行き
五倫の書武蔵は唯の人でなし

倉敷市　本田恵二朗

遠山の霞になってやる明治
ペン先がよく笑う日の原稿紙

中島生々庵選

鶯の声が峠の雨を縫う
自慰と自嘲とが大声で唄う
城下町ここでもイデオロギーがもめ

八尾市　宮西弥生一

ウソ一つ女を守る楯とする
約束の時間を守って焦ってる
七人の敵に向う矢染め分ける
今ここで逢えば夢が消えそうで
泣きに来た女を帰す石地蔵

宝塚市　傍島静馬

年寄りが動きすぎるのにも困り
ヒゲ剃ってみたが行くあてもなし
おざなりの見舞に病人くたびれる
ニューモードひとりよがりを笑えない
べからずの芝生アベックにはエデン

豊中市　戸田古方

女も男も女なりけり宝塚

弔句友

ナンバ駅今日は句会やおまへんの
改札が二人揃うてアクビした
いろいろの色が飛び込む春じゃもの
手水鉢沈んだ椿の美しく

香川県　三井酔夢

まっ先に咲くは汚れを知らぬ白
容赦なく切られ踏まれたつるバラよ
基隆の夫人達と
胸襟を開くに酒のありがたさ
子や孫の土産ばかりになる女
政治より料理の話　夜が更ける

青森市　工藤甲吉

ジャンボ連休しこたま医療費をとられ
道白く遠く遙かな日を思い
冬鳥は帰るが亡妻は帰らない
よく亡妻が磨いた靴をはいて出る
男やもめは敗軍の将に似て

東大阪市　久米奈良子

母の日へ父母恩重経を子らと誦む
綾取りの糸ほぐれゆく愛を見る
かりそめの愛のすがたか春惜しむ
春宵の細きうなじを労られ
おろかにも流れる水を呼びもどし

八尾市　香川酔々

人間の孤独無数の蟻を見る
焦っても回転椅子は向うむく

作州大原

菜の花を武蔵が切れば蝶となり
人間の顔を見上げるひきがえる
水郷の詩人にひびく櫂の音

大阪市　正本水客

「落花」

散ることは桜吹雪の生きる道
さくら見る見る心の中に吹きたまり
川を花はおおうて白き溶岩流になる
花びらの白うち重なりて川うごく
緞帳はさくら吹雪で春とじる

尼崎市　黒川紫香

賑やかに賑やかに勉強してるなり
雀来て鳩来て寮の昼静か

南房総を巡る

鯛見れぬ嵐小湊に悔残し
灯台の白さに迫る海の碧(あお)
断崖の崩れ落ちそなとこに鳩

神戸市　仲どんたく

賞金はかかわりねえことまぐさ食(は)む
春駘蕩　息子が白を持って打ち
ちらりちらりお見合の母見られ
花散れば濡れてるような緑なり

灰色に女包んで尼の春

倉敷市　水粉千翁

三原山火口にて（四月二十三日）

静動一如ふくいくとして茶に語る
真っ直ぐな道で希望の重さ知る
ひとつだけ聞いてもらうとみんな云い
実感にならぬほんとに勝っていた
地図走る赤鉛筆のひとり旅

高槻市　若柳潮花

木屋町へ祇園の酔を持って来る
春嵐へ思い残さず花は散り
面当てに娘は阿呆を連れて逃げ
紫の藤むらさきの色で散り
糸桜あまえるような影で揺れ

西宮市　島居百酒

打ち明ければ疑い云わねば逃げる恋
落第で退学したのが先に着き
Gパンで琴を抱いて箏楽部
あの頃を偲んで独り夕桜
散りそめてから春愁へ酔いなおし

岸和田市　高橋操子

友人と鳥取関金温泉に六日間遊ぶ

山鳴をきく関金の湯はぬるし
百円のテレビは惜しいとこで切れ
月の傘山の遊びをあきらめる
いでたちがさっそうとしてわらび狩り
団体が来たらし坂を赤いバス

大阪市　小出智子

北海道にて

旅愁とや丹頂鶴の細い足
鳥鳴かず磯の香もなきオホーツク海
水芭蕉恋の重荷を秘めて咲く
そこに救いがそっと瞼を閉じてみる
おしゃれな女にひと足早い夏が来る

大阪市　山川阿茶

長髪の啞もワイシャツピンクなり
ほんとうの私のX何かしら
大学生お釈迦のようにパーマかけ

七十五回目の誕生日（二句）

二十程若く見えるとよろこばせ
つくづくといつまでのびる爪を切り

大阪市　河野君子

追い行けば俄に霞む春の虹
子等不在もろ手寂しき母の日よ
五月晴れ仔犬と戯るあほらしさ
過去のない女に皺が深すぎる
アンテナの感度にも似て妻の位置

富田林市　板尾岳人

寝ころべば母の膝かも知れぬ峰
山男勲章汗で錆びている

母を背に登る闘志は別に持ち
浮雲はふんわり肩につき当り
六月の山は満腹雨を飲む

豊中市　橘高薫風

雲は挽歌　雲は新生　恩師の忌
十年の歳月が澄む竹の節
降伏は心服ならず資本家よ
蝶がいて石に老若男女あり
悒悒たり診察券の母の齢

大阪市　不二田一三夫

犬抱いてコーヒーに来る　ミナミ昼
使用上の注意よく読み遺書もなし
米を買う紙幣はこんなに疲れ果て

寄席

芸人が賢こくなった味気なさ
優越感客にもたせてギャラを上げ

大阪市　吉田圭井堂

選挙雑感

落選の日から路傍の石にされ
次々点が若しやの夢をまだ捨てず
答弁もしどろの筈だメモの誤字
正直に言えば大臣首になる

高槻市　福田丁路

冷やかして買わねばならぬ羽目になり
男子志たてああ五十年
神仏にともかく縋ることにきめ

春季闘争（四九・四）

ゼネストで連休という儲けもの

出雲市　尼子緑之助

連休のバスはぎっしり女性客
スト終る葉桜の上に月
巨きな家建つ　興亡の音を聴く
一と坪の畑背伸して葱坊主

鳥取市　河村日満

義兄七回忌（二句）

墓に酒供えて語ること多き
七回忌またあの事故のことに触れ
薫風にもう水虫が顔を出す
あなたあなたと信じきってる声も老け

門真市　福島鉄児

妻を信じた夫の寝息かも知れず
話すこと覚えて孫の喋ること

スト騒ぎ

車内から見てるホームの積み残し
プライベート女としての意地があり

名古屋市　吉田水車

大写しさすが八重子も老けにけり
ふれ合いもいろいろあって夏木立
この頃は楽になったか犬を飼い
乗鞍の雪もよごれて夏暑し

政権は遠し野党の無策ぶり
物価高妻も体調わるくなり
外と内あまりに違い過ぎる夫
養老院でも行きますとしよりの堅気

島根県　藤井明朗

おふくろおふくろと末ッ子の無精髭
愚痴聞いてもらい静かに飲んでいる
秘密打ち明けて別れて欲しいのよ
見合い写真黙って返すことにする

竹原市　小島蘭幸

割箸のように寝ていて用がない
出来ている親の反対おそすぎた
以前から覚悟してると酔うた秘書
惜しまれる潮時失っして辞めてゆく

姫路市　梅谿庵不酔

老夫婦譲り合う間に席取られ
古い舞残る秘境の客となる
行きずりの女の香りシャネルかも
水中花つつく金魚を倦かず見る

東大阪市　竹中綾女

退院をしてから日記忘れ勝ち
インフレに乗って労使のこぜり合い
蜂にさされて蠅までも孫おそれ
友情が崩れてしもた物価高

松江市　恒松町紅

＝句碑一年句会に寄す＝

緑之助句碑　全国と糸結ぶ
視界ゼロ松江大橋霧の渦
朝霧、夜霧、ぶ気味な風が吹く
凡人にして有難き俺なりき

松江市　岡崎祥月

塩からい汗が生きているしるし
お世辞の好きな課長ばかりなり
兜(かぶと)脱ぐ姿は子等に見せられず
山紫水明素通りする人それでよし

松江市　小林孤呂二

男の世界一寸のぞいて見てごらん
人妻は人妻らしく鶴を折り
表彰状これはみんな妻のもの
一服のお茶で松江との対話

松江市　柳楽鶴丸

春うらら　よく寝て腹もよく空いて
ささやかな安堵ポケットに鍵が鳴る
陽炎が燃えて中年眠くなり
功ならず名遂げず成人病が待っていた

松江市　中川晃男

雨の詩へ傘を忘れた一人ぼち
靴音をかえよう我が家の灯が近い
ケロイドの肌よ若葉よ平和だな

東広島市　高橋鬼嬈

田植機のリズムよ唄をくるわせる
竹原市　三宅不朽

妻の留守ひとりの仕草も尽きひとり
大和路のここも銭恋う寺なりし
蟷螂の殺陣師気取りの斜に構え
不惑とは目薬さして寝ることか
出雲市　原独仙

就職一年息抜くコツも覚えたり
その悩み泣くのに胸を貸しただけ
貸し借りのないを自慢で蓄めていず
恩給がある寝たきりをいたわられ
米子市　八木千代

子を置いて戻る旅路に野火燃える
檻に居て孔雀の自信尾に満てり
お互いの傷へ触れまいワイン酌ぐ
スピンから外されそうで肚を据え
愛媛県　渡辺暁童

カキツバタとは　音律の良さ
元手の要らぬ　うまい薫風
ひどいたるみの　古稀のあけくれ
七光りなる　したい放第
神戸市　小浜牧人

バラの赤　朝の心へ点火する
みどりの風だ心の窓を開け放つ
文鳥が子の手のひらへ夢を乗せ
一株のすみれを墓へ植えてやり
下関市　石川侃流洞

スト解除からお客様お客様
善だけを信じた僕のお馬鹿さん
ズル休み僕にはできぬ気の弱さ
零ひとつ違えどえらいことになり
倉敷市　竹内翁童

貧しくも笑顔のきれいな子等といる
赤信号渡り終ってから気づき
分身の影もすてたい日の失意
期待した手腕思わぬ勇み足
大阪市　川口弘生

籔椿お通をしのぶ濡れ姿
御本尊撫でてるような尼僧の目
紙障子　菊の透しも尼のもの
薬まで指定して旧患したり顔
呉市　槇田英詩

銅羅の音別れの顔にさせてくれ
福の神に一度逢いたいみくじ引く
お父様にそっくり娘気に召さず
使い捨てのように離婚をする世相
今治市　越智一水

花びらを茶席は膝で受けとめる
父の夢見たので仏さま拝み
永年勤続（30年）大臣表彰を受けて

下積のその表彰にある誇り
表彰をかみしめ妻も少し酔い

守口市　野呂右近

泣き処判ってからは只の人
まだ登る階段の有り老けられず
生きて居る妻恋う詩の少なくて
ちっぽけな幸　不自由な手で握り

大和郡山市　森田カズエ

仇打ちのようにお布とん叩かれる
ろう塗ってやれば吾が家の戸の素直
蝶番のこわれたような日の母娘
オモチャ屋へ孫ためらわず入りけり

貝塚市　野坂つき子

星一つ心の隅で光らせる
やさしげな花探してる蝶の群れ
腕組んで歩けば風が歌い出す
しぶちんがうっかり乗ったぼろ儲け

岡山県　嘉数千代香

春や春　春もモンペのまま終る
気持よくゆずって主義は崩さない
子守唄知らずテレビで育てられ
サヨナラへ虫が知らしていた予感

倉敷市　野田素身郎

天気予報はどうあれ連休予定なし
切符売場指先を見て顔を見る
僕が売った中古車僕を抜いて行く
業務日誌の余白が多い大過なし

大阪市　天正千梢

笑えない時も弱虫笑い出し

国分寺

記憶確か千体地蔵尊おわしまし
劣等感かくすチップをはずんどき
枝ぶりの良さうしろからも眺めて見

大阪市　児島与呂志

出来心ちょっと気になる小半日
連れ添うたからでは無いが婿の良さ
上首尾の顔で父上千鳥足
朽葉捨て若いみどりが背伸びする

小松市　馬場魚山

波紋にも緑が映る水溜り
障子張り乾けば不器用さが目立ち
建て売はこんな物だよ戸が外れ
運命の女神が笑う一点差

大阪市　市場没食子

近頃血圧高し
血圧が二百を越してよう飲まず
ポンコツをこう定しました診断書

孫達也

本人もうれし歩けて手をたたき
夫婦もう接着剤の効かぬ仲

青蛙ピョンピョン緑の鼓笛隊
花に水やり過ぎている弾んだ日
動けない筈だ善意に取り過ぎて
つり皮へ皆んな何かに耐えている

富田林市　岩田美代

磨かれた窓へ心の灯をともす
人生の急流岸辺にあえぐ草
雨の音まぼろし揺らぐ旅枕
大ばくち打つ気の株を少し買い

富田林市　和田維久子

成程と聞き手に廻る術も知り
スーパーのチラシで決めた夕餉です
酒ならば俺の人生辛口さ
この指を噛んで欲しいと云う女

倉敷市　藤井春日

点訳の愛は指先きから泌みる
あっちこち声ききわける忙がしさ
老い呆けになりそう正座崩されず
糊ぴんと効いた敷布に明日の夢

島根県　堀江正朗

帰省した子の背へ小さく立ってみる
女医さんの優しさで脈　診てもらい
パラソルを開けばパッと初夏の彩
酔い機嫌なんでも買ってやる気なり

島根県　堀江芳子

隙のない腰の低さにだまされる
待つ事の疲れはむなしくなるばかり
糸切れた友を追う程飢えていず
くたびれた靴は遊ぶ灯を知らず

大阪市　江城修史

曇天を支えるニヒルの煙突か
サラリーと関係のないビラを呉れ
散髪屋オモチャのように抓まむ鼻
惜別の川ならリボン流しましょ

岸和田市　福浦勝晴

他人には気前が良くてつねられる
欲の芽を摘んで定年ととのえる
信念を口に貧乏ぬけられず
百姓の総攻撃と見る田植

倉吉市　奥谷弘朗

三分がこんなに長い赤電話
住宅難こんなところに人が住み
人気通り納まり競馬味気なし
決心を変える言葉が見付からず

大阪市　河井庸佑

底辺のなげきは浮上速度0
足らざるに馴れて家計簿うまくうめ
帰日談やれ香港に空がない
手鏡の角度変えても私です

氷見市　関美子

和歌山市　野村太茂津

おもねりがありあり切れ味試される
切れ味を問えば無心の焼刃紋
無為無策ときには無心もそう見える
頑固さを見せて古刀の深い錆

京都市　松川杜的

東、西、北、稜線うれし京の朝
事務室の電話でOL子を叱る
社運安泰社長室の鳩時計
幸せな鳩だと思う寺で死に

大阪市　金井文秋

妥協して夫婦一組出来上り
据置の値段のままで店晒し
開ける楽しさを小包にして送り
拝観料出さねば牡丹見えぬ寺

大阪市　宮尾あいき

寺の門花咲いて良し散って良し
ジャンボ連休御墓の供花は枯れたまま
薫風に造花もすこうしほころびる

君子さんお姑様へ

米寿なお勝海舟を読む若さ

大阪市　神谷凡九郎

終ったとこからまた始まる僕の時間です
ポイントの切換えがないレール走るよな
何をさせようと僕に生命を呉れてはる
見つめられていると思う眼でみる　私

宇部市　平田実男

増築をするほど歯医者へ持って行き
売る方ももみ手で物価高の愚痴
食える腕持った女の不仕合せ

義父入院

何よりのお見舞い子の顔孫の顔

岸和田市　葛城伊三郎

同じ事聞くにも違う母と姑
うま過ぎる話へわざと乗る策士
徒食してこれが老後の安らぎか
日本沈没嫌な予感のする言葉

大阪市　中川滋雀

今日という命を欲に繰られ
さい果ての便りに鈴蘭添えた無事
あるとこにある番付けを肴にし
興奮の一こまビデオに覗かれる

新宮市　大矢十郎

一徹と阿呆をなだめに春叙勲
里方を語れば妻の他人めき
兄も癌弟の通夜静か過ぎ

言い分はあれどカルテの字が読めず
八尾市　大路美幸

西へ向くカラス炎に包まれる
別々の思いで夜汽車の笛を聞く
モナリザの微笑に偽り覗かれる
倦怠の夫婦へゆらぐ易行灯
鳥取県　清水一保

飲む金は有っても喰えぬ世を嘆き
遊んでるように小鳥を思い込み
靖国の神も迷惑する国会
汚職等する子になるなと鯉のぼり
兵庫県　遠山可住

趣味のない老ひねくれるほかはなし
花作る人には見えず恐れ入り
むつかしい顔に戻った金のこと
見えすいていて菓子箱が差し出せず
八尾市　高橋夕花

八十の母が句にする想夫恋
〃コイチャン〃と呼ばれてふりむく里のまち
子の留守は呼びすてされて妻たりぬ
旅の陽にくずれて哀し一夜髪
大阪市　河股緑水

ほんものの倖せだから笑えない
憎しみもないのに蠅が叩かれる
思い出の旅の岬に一人立つ
お稲荷さん通るついでの手を合わし
今治市　原田一風

寒むがりが脱がずに居れぬ暖かさ
後段の席は食べ食べ聞いて居る
五十年添うても女心があり
カラフルな錠剤数え数え飲み
枚方市　宮川珠笑

芝を焼く煙を追うて青嵐
仲悪い隣りも同じ虹を見る
遠縁が来ると選挙が近くなり
島根県　小砂白汀

蝶をよぶこんな小さな花ながら
押しても引いても動かぬ怖しさ
今日もまた洒落が解らぬまま昏れる
羽曳野市　塩満敏

愛してると云えば妻は吹き出した
値上りの酒としばらくにらめっこ
銀行に支払うだけの用で寄り
米子市　石垣花子

四季の花咲かせて母の留守居役
ハス池の今年限りを惜しむ声

苦しみを一日延ばす注射針

柳井市　弘津柳慶

定退へ晴耕雨読とはいかず
母と娘の女としての喰い違い
あなたなら読めるでしょうと句碑の文字

呉市　林野甦光

善人へ山のこだまが味方する
田園の人情茅葺からもれる
秀才のポーズとるのにもう疲れ

桜井市　岩本雀踊子

葉桜へ毛虫まるまる太り出し
友の死を身近にきいている不安
山菜にめぐまれ慾をもたぬなり

兵庫県　大江秋月

終着駅まで団体がよくしゃべり
山火事の跡の広さを見る車窓
車窓から射す太陽も夏となり

大阪市　阪上十止庵

銀婚

打てばひびく妻なり二十五年経ち
顔上げて不倫が行くぞおぼろ月
難儀なことにアホウがバカを好きになり

広島市　山田季賛

鰹料理さすが高知の味を賞め
椿の花咲く足摺に春近し
足摺で台風通路の話聞く

大阪市　室谷徹舟

誰にでも似ている顔で孫生まれ
祝福は大人の世界孫眠る
偉大なる生命力よ乳房吸う

三重県　川上大輪

いい土産見合写真のことらしい
金で済む話を俺に持ってくる
叩かれた肩へ責任のせられる

松原市　玉置重人

だまされた話　善人自慢する
孫あやす妻見た事もない顔をする

シベリヤ俘虜記読後感

シベリヤの傷ずきずきと長い夜

岡山県　永宗宗義

気に入らぬことは聞かぬ主義で老い
湯加減を嫁に任せた老いの唄
靖国の息子に余生養われ

橿原市　岩井本蔭棒

蕎麦すする高座の芸へ腹が減り
叱ったはあとで恩人の子と分かり

戸板一枚飴ひろげてた亡父偲ぶ

堺市　高橋千万子

他人なら許せる言葉嫁、姑

かんじんの言葉廊下で受け渡し

迷う日にける石もない白い道

倉敷市　稲田豊作

年金を掌に乗せフッと吹いてみる

不足ならべたらコンピューターが故障した

殺さねばならぬ蛆虫早よ逃げよ

伊丹市　小川静観堂

死ぬ事とみつけた忠義の三十年

武者人形に話かけてる児の歩幅

おめでたと言えば若妻らしい媚態

大阪市　福井野迷路

金婚の写真は古く五年前

わが長命鍵は禁煙六十年

大口をたたいて皆の試験台

岡山県　直原七面山

もぞもぞもぞと愛の告白

何かが欠げてて頼りなき人

お暇つぶしの女のおしゃべり

倉敷市　小幡里風

両天秤かけて僥倖待つ卑屈

忍従の父がデッカク見えてきた

付けのきく屋台でみんな月を賞め

青森県　木村涼人

矢車に受ける陽も無く大都会

資本主義カネを万能選手にし

この次は値上げするぞと買わされる

岡山県　大森娯句楽

蟷螂の合掌を避けて猫退がり

土砂崩れ一生を得た蟻が這い

渦潮の種も仕掛けも無い鳴戸

藤井寺市　西いわを

予言者に未来を聴くも楽しひま

果たし合い底なし沼に足を入れ

開眼をしてそれからが迷い出し

八尾市　高杉鬼遊

忘れ傘それ以後お越し下さらず

表札の裏で息する世帯主

干天の慈雨それからの花疲れ

守口市　羽原静歩

宮本村にて（一句）

剣聖の昔に還る　春の雨

やまめ荘にて（一句）

このあたり桃源郷なる昼の酒

凡人の言うべき時は火の車

岡山県　出原敬一

陳情とはかかわりのない園児の輪
手をつなぐ大人がつづく花の道
春の世にしょんぼりと立つ枯木立

平田市　久家代仕男

春斗の声に桜が散り急ぎ
墓だけの故郷へ乗り込む自家用車
親を裏切り子に裏切られ　ひとり

鳥取市　両川洋々

身構えて寡婦甘言を恐く聞き
拿捕のニュース知らぬ港の子がはしゃぎ
甘言も信じてみたい岐路に立ち

松江市　舟木与根一

昭和二桁ふんどし締める意味知らず
また田甫埋まる蛙の絶唱よ
政治不信を肴に悪酔いし

泉大津市　村上春巳

ハイハイの妻で何やら物足らず
たいくつがたいくつを生み寝転ろがり
愛つつむ夜霧よお前はキューピット

京都市　都倉求芽

掃除器の唸りもさわやか五月晴れ
新茶入れる機嫌母がチャンネル回してる
アンケート項目程に割り切れず

岡山県　池田古心

太陽に背を向け裏道ばかりより
宴席で過去の杵柄三味に乗り
妓から名指しは放蕩売れた顔

西宮市　藤村〆女

寝つかせる童話へ私が眠くなり
一滴も飲めぬ女のかくし芸
お揃いのゆかた湯の町の灯に浮かれ

東大阪市　竹中肖二

雨の日は歩いてバラの道を選り
お隣のバラで明るくなった庭
二人ずつ並んで公園夜となる

鳥取県　森田布堂

暴力は反対という暴れよう
商魂のねばり時間を気にかけず
泥棒に同情をする金詰り

柏原市　大峠可動

どの道も恍惚までの距離なのか
悟し合う瞳が好きで深まりゆく愛だ
白ければ路傍の石と嘲うのか

笠岡市　松本忠三

お待ちどうさまがほんとに長すぎる
鯉幟り団地サイズで泳いで居
掴まってたまるか俺には羽根があり

岡山市　川端柳子

子に賭ける夢はふんだん五月晴れ
うちの子の名前忘れたあがりよう
見晴らしが良いが自慢は墓のこと

大阪市　黒田真砂

句会夢に見て病床の夜を更かす
周囲の目おそれず女の生きる道
過去捨てた日から女の夢開く

諫早市　原田明春

左遷嘆くまいおかげで美味い風吸える
熱演のどど逸唾気までとばし
叱られている口髭が偉く見え

東大阪市　斎藤三十四

表彰に陰げの助力をほめてくれ
名目はどうであろうと銭儲け
飛鳥道野仏立ったり座ったり

八尾市　飯田悦郎

うやむやのそこに夫婦の城があり
仕合せなドアーに不吉な音がする
親馬鹿の夕餉ぜんざい食う笑顔

米子市　林瑞枝

アルバムに身内意識の過剰なる
貴重なる休日悠長な客と座す
家事育児とっぷり寝たい願い持つ

島根県　錦織文子

初夏の色指に吸わせて蕗をはぐ
子らが皆集うて母の浄土たり
眼鏡ふきふき無心を聞いてやり

倉敷市　能登原白水

平凡なパパの口調にある知性
七人を育てて老後には触れず
ご機嫌のパパにレモンを厚く切る

竹原市　時広一路

保護色が息をしていた雨蛙
釣針へよっぽど運のない魚
クモヒトデ何を探すか足動く

竹原市　森井菁居

いつまでも敗者でおれぬ矢をつがえ
忙中の閑を競馬にしてやられ
◇長男満二才
陽に焼けたのが頼もしく見えて親

笠岡市　出原真奇

苗代は秋くる嫁の分も蒔き

借金は断わられ犬には吠えつかれ
さもなくば別れましょうとつめよられ
大阪市　柳原静香

この子等が居て倖せな母の日よ
浜名湖慰安旅行
使用人を上座へ据えて酌ぎまわり
名刹を巡り仏心にまだ触れず
鳥取県　川崎秋女

悔少し残して戻ったひとり旅
盛衰の歴史をきざむ防波堤
自尊心満し甘言に酔うている
大阪市　津守柳信

タンザクに魅かれ今年も通り抜け
産み分けも出来ず賭けてる三人目
自尊心世帯の色に染め分ける
大洲市　堀内暁風

ケチと見栄筋を通して妥協する
丁寧にもの云う癖に黒い肚
母の味バンドゆるめて三杯目
松山市　谷のぶお

乳母車残して孫は東京へ
風車売るお婆さん眠くなり
銀の鈴猫はやっぱり爪を研ぐ
貝塚市　行天千代

一枚ずつ脱いで心も身も軽く
船や人のんだ海とは思われず
病む友へ旅行の話聞かすまい
神戸市　佐々木静泉

貧しさに慣れ過ぎている恐ろしさ
美人薄命長生きまちがいなしの妻
晩飯のおかずが勘で当りだし
茨木市　吉川米子

ばんざいをまだ所望する老人会
六十の手習い巾を拡げすぎ
微小でも花も実もある罌粟の種
仙台市　川村映輝

田植唄テンポの合わぬ機械植え
わが事は言わず政治のせいにする
司会者の饒舌が座を白けさし
奈良市　宮口笛生

祝日に国旗明治の父がいる
ベア大型連休を派手にいく
兵庫県　河原みのる

カミナリの恐くない臍突っぱしり
田地より日ゼニが嬉し農婦にて
大田市　藤田軒太楼

勝つまでは縁起をかつぐ髭であり
鉾先をかわしまんまと悦に入る
鳥取県　鈴木村諷子

夢にまで昔の軍隊いじめに来
花嫁衣裳借りるばかりの値段なり
尼崎市　高津徹也

原稿用紙のマス目構わずプロのペン
太陽が昇りすべて夜の負け
東大阪市　落合思月

車椅子男一疋生きている
亡き夫の表札今だに外しかね
大阪市　今西章雅

ソロバンに合わぬか参道乞食減り
誤解出そうな写真アルバムからはずし
東京都　増田次章

モナリザもパンダも同じ見られよう
団らんの型テレビの方を向き
大阪市　藤田頂留子

高物価廻り灯篭の夏が来る
　超能力ブーム
曲りそなスプーンから売れてゆき
東大阪市　桑原喜風

見栄ほどに児は喜こばぬ鯉幟
物価高市場篭にもある誤算
大阪市　神田秀峰

犠牲者が出てから予算付く工事
大工事蔭に哀れな人柱
米子市　増田竹馬

背伸びして顔を洗って猫散歩
百万の味方男の子が生まれ
大阪市　西川誓二

まだ今年も居すわりたもう貧乏神
　浄土宗開宗八百年記念法要にて
恵まれし仏縁法の座は温し
島根県　榊原秀子

母の日へ子等は電話の贈りもの
山怒るふるさと呑んだ跡へ佇ち
大阪市　飛田好一

早よ去ねと言わぬ許りのお茶を出し
久々の和服へ初夏の風がすけ
堺市　伏見茂美

工場閉鎖メーデー歌ふと口に出る
セールスの今日は無手かやよごれ靴
倉吉市　渡辺菩句

佐渡おけさ流れる港にわかめ売り
金杭に入りて記念の石拾う

小さな窓春が会釈をしてすぎる
嫁の茶が頃合い計ったように来る

宿毛市　瀬田美知

人遊ぶ時を稼ぎの仕事もち
化粧する鏡の中も旅の顔

宿毛市　山本窓花

お毒味をしているような食生活
年経れば疵痕さえもなつかしい

大阪市　本間満津子

初恋もなくて小皺を気にしはじめ
老人にうれしい春がもう逃げる

大阪市　鈴木生仏

手折られる運命も持ちつつじ咲く
天災の遺族にマイクの憎しとも

八尾市　内海幸生

さりながら喜ぶこともまた多く
朝ごとに緑情性を叱るごと

川村好郎

精一杯咲いて賞でられ散るつつじ
老いてなお二人だけなる言葉持つ

西尾栞

彩を持つ故に花のはかなき
今日からは無役御免の衣更え

伊豆の湯にやれやれやれの顔が浮き
調子よう同県の芸者喋べり出し

菊沢小松園

ラーメンで芸者をまいて来た話
宿の下駄旨いコーヒーないと知り

鐘の声これが京都のおみおつけ
親の手で鉛筆の芯尖ってる

若本多久志

死なば仏わたしを拝んでくれる人
野良犬へどこまでつづく晴れた空

何もした覚えないのに世間の眼
無理をせず白寿へ挑む主義に変え

北川春巣

傷、病のすべては神にと医祖パレー
心満ちた夜石仏の旅を練る

公衆衛生関係で大阪府から表彰を受ける(五・三)(一句)

狂乱の物価荒野を駆けめぐり
老人の自由　不自由の中にあり

立って座って表彰式がすみ
環境の改造くたびれだけ儲け
鏡もういらない妻の白髪見る
定退は食べ歩き地図なども買い
定退後急行通過の駅でよし

川柳塔社創立十周年
同人句集発刊記念
― 路郎忌川柳大会 ―

日時　昭和四十九年七月七日（日）
　　正午開場・午後一時締切

会場　大阪府教育会館新館四階大ホール
　　天王寺区東高津町一二の二（但し上本町六丁目交差点東北百米）
　　電話761―七〇六六・七〇五〇番

司会　西田柳宏子
開会の辞　若本多久志
挨拶　中島生々庵
柳話「川柳塔十周年を顧て」川村好郎
兼題　独酌　西尾栞選
　　好き　岡橋宣介選
　　旅人　三条東洋樹選
　　流行　福永清造選
　　祭り　堀口塊人選
　　見事　増井不二也選
　　なさけ　金泉萬楽選
　　生きる　中島生々庵選
　　（二題当日発表）各題2句

席題　菊沢小松園
閉会の辞
会費　五百円　（共に記念品呈）
投句料　三百円
（閉会後懇親宴・会費千円）

会場変更にご注意ください

大阪駅、または天王寺駅から環状線でお越しの方は「鶴橋駅」で、近鉄線ナンバ方面行きに乗りかえ、次ぎの「上本町」で下車。路面北側に出ていただくとスグわかります。

大阪駅から地下鉄でお越しの方はナンバ駅から近鉄線に乗りかえ、「上本町」下車。上本町とは上本町六丁目近鉄百貨店のあるところです。地方の方でわかりにくければご説明いたします。

（ふるってご参加ください）

紀内恒久
（教員）
〒351 埼玉県朝霞市膝折町2—9
膝折市街地住宅2—405

誹風柳多留廿五篇研究

—(三)—

紀内恒久・室山三柳・青木迷朗
入江勇・西原亮・清博美
鈴木黄・八木敬一・岡田甫

37 **猪の逸太様の御長屋山師聞キ**

紀内—「猪の逸太」は源三位頼政の臣。頼政が鵺を退治したとき、これをよく助けたという。鵺は御承知のように、頭は猿、体は狸、尾は蛇、手足は虎という怪物。何か見世物に出すような珍物はないかと狙っている山師、この噂を聞きつけて、早速、早太の許にかけつけたであろうとの句。

頼政ハいゝ見せものと射ておとし　拾六・2

猪早太見世ものしから礼をとり　拾五・18

猪の早太様と聞てハ山師来る　三九・15

西原—「御長屋」などと、江戸時代風に（当時でいえば現代風に）おろしているのもおもしろい。

室山—賛。『平家物語』巻第四「鵺」。謡曲「鵺」。

鵺のあと行方の知れぬ猪の早太　拾四・25

西原—賛。「ふじびたい」を詠んだのに、すそのにハ人穴のあるふじびたい　三二・29

室山—賛。「富士額、女のひたひを富士山の如く作るをいふ」（『俚言集覧』）。

入江—礎稿のように、遊女としてもきれいに落ち着くが、妾ともとれる。

清—「馬鹿を待チ」だから、遊女としなければならないでしょう。

傾城はへその下まで富士額　一〇三・20

出格子のすだれにかすむ富士額　一三〇・7

八木—富士額、遊女賛。

岡田—吉原の遊女説に賛。「富士びたい」黒髪と色白の美女の形容詞。当時の女性の化粧は厚化粧をせず、厚化粧をすると明治時代でも、まるで売女のようだと卑しんだ。しかし遊女は厚化粧で、富士びたいの美人らしく見せかけたのは勿論のことです。

38 **白粉で富士を作て馬鹿を待チ**

紀内—客商売をする女の、商売前の化粧か。そして、その色香に迷って来る馬鹿を待つ。これを富士山の雪をにおわせての句作。ここの「富士」は富士額。

おしろいもそのよ消へてハ其夜ふり　五九・23

入江—賛。『俚言集覧』に「山師ハ金山を監定する者を云。本来ハ姦悪の者をいふにあらず」という。原意から転じて詐偽的な事業をなす者の称となった。ヒューマン・インタレストに乏しい江戸時代、この方面においても山師の暗躍は今日の比ではなかった。本句もこれを背景にしたもので、山師への軽い揶揄がくみとれる。

清—諸説に尽く。

岡田—同。

39 **蝶々かとまりなむさんほうにする**

紀内―「蝶々」は鰒の毒腸の異称。鰒の毒はここにあるといわれる。また、「なむさんほう」は「南無三とばかりも云南無悉皆と云ふも過てるときにいふ諺也」（『俚言集覧』）とある。すなわち、「しまった」という意の感嘆詞。従って句意は、鰒の毒にあたると、万事休すということか。

こわい蝶々は肴にとまる也　　鏡・23

西原―賛。「鰒の蝶」という。「とまる」については、昆虫の蝶が木の葉などに「止まる」ことからの縁語で、鰒の場合は「中毒」という意でもあろうか。

室山―賛。「南無三宝」は、①三宝（仏・法・僧）によびかけ、助けを求める意から、恐れ驚いた時に発する語。ああ。②驚いたり、失敗に気がついた時に発することば。しまった。主題句のばあいは②であろうか。

岡田―同。

40　丸山でくぜつこはぜがおっぱすれ

紀内―浜田義一郎氏編『江戸川柳辞典』にこの句を引用し、「痴話げんかで胸ぐらをとってもボタンがけでは勝手がちがう。ボタンを知らないで足袋と同じこはぜとはおかしい」と注がある。しかし先行吟に、

丸山でとるむなくらハぼたんかけ　　拾八・21

があるので、「知らないで」というより、ボタンを足袋のこはぜと洒落た句作であろう。

丸山でこはぜをはづす三会目　　八〇・24

西原―賛。「洒落た句作」とは御明解。

室山―賛。しかし「ぼたん」の語を知っていたにしても、「こはぜ」といわなければ句にならないし、そう呼ぶことに江戸人らしい見識もあったのであろう。

入江―賛。同想句に

丸山でくぜつ小はぜを引ちぎり　　九六・6

丸山は江戸の吉原、京都の島原と並ぶ三大遊廓の一。長崎のそれは、実は丸山町（四千五百三十八坪）、寄合町（五千百四坪）にまたがった花街の総称であり、この寄合町の存在は案外知られていない。「坂の長崎」の土地柄、寄合町は土手より入口へ縦に傾斜し、丸山町は横に傾斜する。従って遊女屋の軒は段落ちになっており、窪地のため眺望もよくない。他の遊廓のように軒並みそろわず、石段が大小とりまぜて随所にあり、さながらミニ・カスバを往く趣きがある。

延宝版「長崎土産」には、遊女屋七四軒、遊女数七六六人と記すが、元禄年間には一、五〇〇人を数えたという。「長崎に丸山といふ所なくば、上方の金銀無事に帰宅すべし、ここ通ひの商ひ、海上の気づかひの外、いつ時しらぬ恋風おそろし」と、西鶴は『永代蔵』にいう。

丸山の繁栄を支えた基盤は、外国貿易にあったことはいうまでもない。ここに集った上方商人の利潤をかなり吸収したことは、西鶴のオーバーな表現にまつまでもなく事実であろう。

なお蛇足ながら、江戸人は唐毛人が丸山に直接登楼するがごとく錯覚し、川柳に詠んでいるが誤りである。

八木―オランダ人はかかとなし、という俗説があったので、そのためこはぜが外れ易い、という含みがあると思う。

岡田―諸説に尽く。

41　折紙が娘へ付くと疵になり

紀内―どうもはっきりしない句。駄労解を記す。娘に色文が付けられると、言い寄る男が居るということで、そんな噂が広まれば、娘にとっては重大な疵となる。本来「折紙付」といえば疵のない証明なのだが……。ということか。

青木―礎に同じくはっきりしない。

西原―元来「折紙が付」けば、疵物でないという証拠。ところが、娘の場合、折紙が付いて結納すれば疵（嫁）物になるという逆説的なおかしみであろう。

堪忍の折紙今に直が落す　　二八・18

入江―西原氏の逆説説に賛。

岡田―小生は軽く「あいつは折紙付の娘だ」すなわち近所でも有名なフラッパー娘だ……こういう折紙付がついている淫奔娘と解していました。

岡田甫著　　好評増刷出来
川柳東海道　上　下
各冊八五〇円（〒一四〇円）
書店でご注文を！　読売新聞社

私の川柳写真関係の専用アルバムの巻頭にあるのは、浴衣がけの路郎先生御夫妻が、打ちくつろいで一パイーという大きなスナップ写真である。

一見六十代の、打ちくつろいだ夫婦水入らずの図と、ごく単純に眺めてもなかなか味のあるおふたりの、その顔、そのポーズである。苛烈な人の世の試錬に、遅しくたち向い、そして風雨にもめげず、おれたちは、わたしたちはここまできて、今日ただ今のこの一ときをこうやってさし向いで、酒を傾けあっているといった、相互信頼もみるからにあたたかいものがいっぱいといったムードの写真である。路郎・葭乃と二つ名前をそろえてかいて、そのまん中にから傘のタッチ。それが白壁の小春日和に浮いている。それに身幅のきいた重畳たる歳月がどっこいしょと居すわってーとにかく庶民的年期の入った夫婦像が肌合い濃くそこにある。私の大好きな写真である。

この写真は、生々庵さんが、先生の胸像とともに私にプレゼントして下さったものだ。傍らにたしか、先生もいられたように記憶するが、二十年近い話でしかとは記憶にはない。

しかし、昨日のように私の網膜にくっきりと残るのはつぎのシーンだ。そして会話ー。

「ところで先生、あんたという人は、難しいお人ですね」

「ああ、みんなもよくそういうねん。カゲへ回ったら相当ボロクソらしいねん。とっつきは悪いし、二言目にはいいたいこというてー生れつきお世辞はニガ手やさかいに……」

「わたしとよう似とります。そっくりや。まあ、お一つ……」

ほほ骨のあたりをボウッと赤くそめて、微笑いっぱい。そんなサカズキのしずくの下では、こげついて真黒のすき焼なべ……。

昭和十九年九月、大阪から疎開先の三重県まで、十六才の三男と一台のリヤカーに、本や家具をのせて、三日がかりで運んだ話がそのときに出た。がんこで依古地で、思ったことはこのクソったれでやってのける、そのド根性が、川柳にもよくそのままに出ている。カネにもならん職業川柳人たらいうて、カネもないのに……この一事が万事で、よく人間路郎のその真骨頂を物語っていると私はいまでも、酒の中でよく首をふりふり銘記するこ

路郎と酒

東野大八

と再三再四のことではない。

このころの川柳雑誌をとり出してみる。ナンバー三百二十号前後だから、ちょうど今から二十年前の、路郎川雑のあぶらの乗り切ったころのものだ。その中に「川柳・夫婦善哉」という特集記事がある。葭乃夫人を語る路郎女房観の一筆がトップだ。ベターハーフの作品についてーの質問に答えてこうある。

「なかなか上手（川柳が）です。「のんで欲しやめても欲しい酒を酌ぎ」や「福寿草松にしたがい候かしこ」と云うように句によって良妻ぶりをみせております。スローモーションですが、おそらく死ぬまで作るでしょう。」

これに対する葭乃夫人の背の君路郎観

「路郎の句には鋭い諷刺的なものと、詩的内容を多分に持ったものとの二つに大別する事が出来ます。総括して批判いたしますと「桜かざして今日も暮しつ」といった風な大

宮人属の境地は見られません。ロシア文学を愛好する路郎の句は色でいえば寒い色です。大体淋しい句が多く、詩的内容を持つ句には、特にその傾向が顕著です」

亭主をみるに女房にしかずで、賢夫人の才女のホマレ高い葭乃夫人は、さすが寸評、ぴたりツボに入った路郎観である。

この辺で、書き出しの酒にかえる。

（この写真は先生の七四回目の誕生日記念）

この写真の裏に先生の真筆で（一九六二年七月十日　七十四回誕生日記念　自祝乾盃自宅にて麻生路郎。ご馳走はいただきました　大鯛を中心に有難うございました　生々庵さま　小石奥さま）と書いてある。

川雀№三二三（昭和29年4月号）に〝いける国の人々〟の特集記事がある。ここからネタを拝借しよう。（この座談会の仲間は路郎先生をサカナに、水谷鮎美、中島生々庵、友淵貴山、北川春巣（司会）のみなさん）

以下は路郎先生の発言なすった分を、一人称とした。酒の上なので原文尊重ながら、少々整理もムードを出してまとめた。

この間、新聞に冷や酒一升を二十分間に飲んで死んだ青年のことがでていた。これは酒を飲んだとはいえないね。私も子供の時分から酒を飲んでいたが、七つのときに冷やで二合飲んだことがある。

私は学生時代には、学校の相撲の代表選手だったが、学校が本職の力士二人を雇ってコーチに当らせてくれた。稽古がすむと、力士たちとよく一ぱいやりにいったものだが、そのころは量的には最高に飲めたな。三升ぐらいは飲んだ。もっとも一気にのむのではなくて、ちびちびへたって飲んでだな。

新聞記者時代、三百人ぐらいの宴会で盃のやりとりをして回ったあと、二次会でまた大いに飲み直しをやった。その時分のことだが、芸妓とコップ酒の飲みくらべをやった。下へおいてはダメで、飲んだらすぐさす、相手がのむとすぐ貰う。こういう風にいったりかえったりでこちら二十六杯のんだ。一パイ一合として、その二十六杯。まだいける自信がこちらにはあったが先方様がのびちゃった。

私は普通、晩酌はやらない。だから、少しも飲まない日もあれば、四、五本のむ日もある。もっとも飲む飲まぬは、懐ろ具合一つで決まった。私の句に

―君の酒はいいといわれて松の内

というのがあるが、私は酒が入るととたんに人並になる。しらふだと、七難しい顔なんで女の人なんかさっぱり寄りつかん。それが飲み出して少し回ると世間並みの人間になる。

酔うても酒癖がいいので、家人には評判がいいが、やはり酒癖が、妙なのが別口にあるんだな。戦前は飲むと本屋へ行き、本を一抱え買ってくる。時には呉服屋へいって一抱えといきたいがそうはいかんので二、三反を抱えて帰ってくる。普段は呉服屋など見向きもせんのだが、酔うとウィンドウの色や柄が眼について仕様がない。それも、こんな色や柄は誰がきたらよいか、悪いかなどのコマカイところは全く頭にない。いわば衝動買いだな。持ってかえって葭乃に、どーや、というと、こんな派手なの着れまっかいなという、じゃあ娘―というとこんな地味なもの、アホくさという具合だな。

キモノといえば、ある市電に勤めている女の子の母親が、地下鉄のキップ売りをしているというのをきいて、折よく持っていたのが

母親向きやと判断して、そのおばはんに〝あげまっさ〟というたら、その母親がキツとした顔つきになって〝私には夫がいて、見知らぬ人から反物なぞ貰えませぬ〟というんだなあ。妙な風に誤解されちゃあ困るというわけだよ。仕様がなくてその着物を私の寝巻にして自分で着てしもうた。柄や色が面白いので買うたわけで、本当につぶしのきかんもんよく買うては往生したなあ。

緑雨君の句にこういうのがある

—酒ついであなたは一体どなたです

縄のれんの腰かけの句やな。亡くなったかおる君は、若旦那風だが飲むとがらりと人間が変ってスゴくなる。交番へ文句をつけにいって、あべこべに巡査にとっつかまり、財布の中味を調べられた。べろべろのかおる君「中味の金はあんたにあげまっさ。そのかわり、これは入れとくとゼニがたまるそうやから、かえしとくなはれ」

とまくら絵の一枚をとり出し、わざわざ巡査にそれをひろげてみせたりしたそうだよ。このかおる君、梅田でタクシーに押し込み、ドアをしめてハイさよならすると、向う側のドアから出てきて、いよう今晩は—これには参った。

野介君の句に

—梯子酒わが淋しさの限りなし

というのがあるが、私が梯子した記録は、新開社時代の九軒だったよ。

—飲んでほしやめてもほしい酒をつぎ

という葭乃の句があるが、うちの家内は、酒の上で意見したことはない。家内は酒好きの方やから、身体をこわしさえせなければ、のつもりらしい。もっとも意見をしてもきく亭主じゃあないことぐらいはちゃんと知ってるがね。

最後に飲んだ方が長生きするか、飲まぬ方が長生きするかの問題だが、私は飲んだ方が長生きをすると思うな。長生きとは心配せぬことだ。日向ぼっこしてうれしい気持になっていると長生きする。

アメリカの「健康」という雑誌に、飲むとうれしい状態になりやすい。飲む人が飲まなくなると奥さんが警戒する。酒を飲んだら早う死ぬという根拠や理窟はない。私らは酒をのんで養分をとる。仕事の上でもグッと圧縮して頭を使わなきゃあならぬ人は、酒が必要だね。酒をよく飲むのは労働がはげしいときだよ。仕事をしないときは飲む気はあまり起らないが、原稿をぶつつけ三日間も書くと飲まずにゃあおれない。生々庵氏がよく飲むのも仕事がエライからだ。仰山な病人を次から次へみていく気を張った仕事では、頭を使うだけに、飲まなきゃあおれんのだよ。

この大八はこの稿のため、この二十年前の座談会を丹念に読み返したことだが、今更ながらに、路郎という人間の人知れぬ胸の奥の寂しさをまざまざとそこにみる想いがした。

（よく、おれと似ている）

私はそう胸の中でくりかえすこと数度であった。私は酔うと本を買い、酔うとなんでも持っているものを他人にくれてしまう癖がある。若いころからブンヤの渡世で、書くことばかり、頭脳が作業服をきてるようなものでその疲れの妙薬こそが酒であった。路郎先生の最後のそんな酒の功徳のくだりにはコックリして、ごくりとノドが鳴ったくらいだ。

—晩酌を祖父代々の家風とし　生々庵の句は、私の家風そのままであった。生々庵さんは、そんな家風のトレーニングで、ビールの最高レコード二十九本とあったが、私のレコードはそれに三本不足している。（ともに二十七歳ごろ）

—酒とろりとろり大空のこころかも

路郎先生の作品の、この私の大好きな句があってこそ、私には

—二階を降りてどこへ行く身ぞ　路郎の句がはじめて胸を噛む鑑賞となってくるのである。若気のころの豪酒のムードがあればこそ、いまの老こそ豊穣ともいえる。酒と路郎—路郎と酒……久しぶりにたのしい縄のれんの腰掛ムードで先生といっしょの気持にこれが書けた。

「旅人」以後の 麻生路郎作品 —31—

三十七年七月号

不朽洞句帖

自分すら救えぬ人の立候補
宗教家即政治家の俗の俗
云わしておけば若造が公約す
必勝と書いていたのがおかしくて

理由なき殺人があり世も末か
老人におもちゃなしバラの前に立つ
又 遭難か 蟻にも ひとしき
健保の医者の ヘィお次ぎ ヘィお次ぎ
奥さんを缶詰にして稼ぎに出
数に弱くこれからの世をいとい

大阪逓信病院鳥ケ辻川柳会吟行「一生」

一生をコマギレにして眠りたり

南海電鉄川柳会「催し物」

催し物へ便乗組みの猿廻わし

（傍島静馬）

近作

杜若そのむらさきを寡婦好む
人生へもうろたえぬ茶をすすり
筆とめて蛙の声を懐しむ
藤咲いて二浪落付き取り戻し

五月号記事より

月ケ瀬の女史は余りに老け給い

今治市 月原宵明

綴り方やっぱり嘘は書けません
自転車を降りねばならぬ人に逢い
洒ぐせもあしらい馴れて五十年

大洲市 米沢暁明

後添いのまごころ紅い物を着る
我の折れてからの補聴器よく笑い
男一匹崖にも虹をもつとする

岐阜市 市川鱗魚

お茶の間で美空ひばりに敵味方
パチンコの指に勝つ曲負ける曲
フォーリーブスかけると父は寝てしまい

東京都 池口呑歩

騙されて悟りましたと負け惜しみ
包んでは包みばあさん置き忘れ
過疎に踏みとどまる勝利哀れなり
葉桜が済んでも続く怠け癖

今治市 長野文庫

路郎賞
川柳塔賞
候補作品中間発表

自　四九年二月号
至　四九年五月号

路郎賞候補作品
（到着順）

川村好郎

木枯しも言い分あっての鳴咽たり　岩田美代
人間の特技笑顔が作れます　小野　克枝
一ミリに足りぬ虫さえ歩を刻む　西　いわを
敗けて来た拳で拓く新天地　松下　梁水
お喋りの女が火種置いてゆく　小浜　牧人
複雑な気持で老齢金を受け　吉田圭井堂
よく似合う人に巻かれよ春の帯　高橋　操子
星屑もひとつの誇りもつ光　河内　天笑
義理一つ返せば心に灯がともる　江城　修史
子と歩く一歩遅れて胸を張り　水粉　千翁

正本水客

出る杭になろうと土台蹴って見る　野村太茂津
虫抱いて落葉も冬の底に寝る　若柳　潮花
冬になる音雨になり雪になり　堀江　正朗
淋しさを飲めばいよいよ雪明り　三井　酔夢
妻逝けば地球も落ちてゆく思い　工藤　甲吉
昼の月瓢湖に映る力なし　橋高　薫風
一テンポ早く病棟日が暮れる　時広　一路
よちよちと追えばよちよち鳩も逃げ　安平次弘道
日の丸のことでもめてるのが日本　渡辺暁童
傷口をなめ合う余祐ない若さ　木村弥栄子
小野田元少尉還る
一億の一粒となる背広着る　高杉　鬼遊
独り暮しの外灯とは見えず　黒川　紫香

若本多久志

水仙が咲いたよ仏さまへ切る　越智　一水
這い這いの児が貧しさをカバーする　高木　桃里
刻んでも刻んでも潔白な大根　堀江　芳子
話中　まだ話中　十二月　高橋千万子
波頭避けて寄り合う舫い舟　谷　のぶお
耐えること名もなき石に教えられ　本田恵二朗
さりげなく礎石は塔を支えきり　小砂　白汀
義理一つ返せば心に灯がともる　江城　修史
凍てた道踏みしめ女の遠い旅　和田維久子
かあさんの墓かあさんがいるぬくみ　宮口　笛生
転がったままじゃが芋は芽を伸ばし　小浜　牧人
スミ吐いてイカ透き通るまで干され　木村弥栄子

北川春巣

仮面脱いでひたる湯舟のくつろぎよ　本田恵二朗
でこぼこの座敷へ通る野だてかな　吉田水車
話中　まだ話中　十二月　高橋千万子
老眼鏡かけて切符のボタン押し　太田　良子
柏手が澄んだ！　叶えて貰えそう　八木千代

綻も縫えずGパンよく似合い　木村　涼人
盃洗を下げてムードが盛りあがり　傍島静馬
年賀状そろそろ尻尾振りはじめ　本多　柳志
耳鼻科医の春は鼻血の患者から　川口　弘生
包帯を尋ねてくれぬのも淋し　遠山　可住

西尾栞

人間の特技笑顔が作れます　小野　克枝
温めても温もらぬ手のむなしさよ　工藤甲吉
歌留多とる過ぎにし恋の声上げて　岩田美代
酔うて来て話のわかることを言う　森井青居
それぞれの調和がここへ寄って春　遠山可住
人生を裏口入門から初め　木村弥栄子
役どころ心得て来る割烹着　出原　敬一
たとえばの誘いにうかと乗せられて　中川　晃男
間に合えば山で鍛えた骨やろう　板尾　岳人
鈍行はよし無人駅から春を乗せ　野村太茂津
ハラハラしていても父の座に父で居る　遠山　可住
朝市でまだ憶病なエビのひげ　関　美子

菊沢小松園

花咲いてとなりへものが言い易し　本多柳志
子が生れその子が生れ消えるのみ　大路美幸
嫁ぐ娘の心へ持たす銀の鈴　小浜　牧人
今のとこ眠れる獅子でいてやろう　藤井春日
煮え切らぬ男確かな耳を持ち　浜田久米雄
どの指も大事手袋着せてやる　岩本雀踊子
粗相した犬悪びれた目を向ける　大坂　形水
かあさんの墓かあさんがいるぬくみ　宮口　笛生
過去みんな捨ててきれいなさくら貝　小砂　白汀
実印よお前は何ンでも知ってるなア　河原みのる

川柳塔賞候補作品

大坂形水

老いの旅方向音痴の妻連れて　池田香珠夫
幸わせが続く夫の声がする　川上　富子
春ですと鉢の崩芽も叫びそう　横地　正影
納税のポスターかわい子ちゃんの顔　堀口　欣一
欺されることもおぼえた冬　女　小谷　葉子
いやだいやだ銭の匂いが身にしみる　秋田茂
半泣きの顔が出て来た社長室　中谷　利美
肩書きの数程顔のしわもあり　大原　葉香
表から帰った妻の匂うなり　武内　雅堂
店仕舞してるでもないビリヤード　山根白星

橘高薫風

病むはかなし指をまさぐるだけの恋　三宅　不朽
甲斐性ない男へ客の燗ざまし　山根　白星
娘三人嫁かぬ比べをする暮らし　大本バット
言い負けて黙々と読む学術書　西本　保夫
良い嫁と云うて独りで生活してる　本間満津子
東京へ電話掛けいと云う手紙　真山　国彦
二度三度言う癖抜けず元教師　三宅　ろ亭
色も香もあせてもっぱらまとめ役　荒田つる
ポスターが笑って天地吹雪する　安田　勝己
スリッパがひんやり並ぶ性病科　梅本登美也

戸田古方

ぶらんこに乗って哀しみ空に撒く　鈴木朋子
雑言を消化して聞く耳を持ち　神夏磯道子
出直してみたらと鼻緒に教えられ　江口　度
保証ない祈祷料とは知りながら　野呂　杜月
煮凝りの味もやっぱり鯛は鯛　堀口　欣一
二人連れよけてよけてひとりの雑踏　宮崎美津子
くたびれて一番うまかったのが番茶　内藤ますえ
慣れに生き慣れの怖さも七回忌　藤井　晴月
嫁来れば部屋に空気の花が咲き　福富　隆子
アスファルトの割目雑草が枯れる秋　山田スミ子

万葉抄

川村好郎選

母の日の母太陽と野良にあり
春闘の夫を信じてみごもれり
シンデレラとならん産着を純白に
妬心ふつふつ女の足袋のうすよごれ

岡山県　谷川渥子

天と地を一人占めして野良たのし
閉された寡婦の心が風呂に融け
地下足袋のリズムも軽い春の野良
貧しさを詩で豊かにして足りる

弘前市　小山内貞男

経営はたしか振りこの父がいて
妖精の踊りみじかし木蓮の
口癖の早う帰れがこびりつき
かたくなに心とざせば抜ける空

島根県　谷岡芳枝

限界を知らぬ若さが羨やまし
愚妻愚母小さな今日に満ち足りる
先走るおしゃべり後悔が後を追う
返事せぬ心の奥が読みとれず

大阪市　神夏磯道子

野良犬はその日の糧は見付け出し
耐えられぬことを聞くのもおつき合い
プラットでほっとした手も振られてる
みにくさを紅白の幕目出度くし

守口市　岸本豊平次

愛憎の心なごます鈴の音
長電話する娘に家中耳すまし
負けて勝つことも此の頃わかりかけ
散り急ぐ花もわびしい過疎の村

米子市　佐伯越子

お花見をさそい合うてるうちに散り

和歌山市　樫村ふみよ

病むよりも看護の夫の目がくぼみ
夫婦して話題の名前出ぬ老化
巣立ったらもうとまれる親小鳥

羽曳野市　麻野幽玄

神よりも人の情が欲しい今日
恋を聞く一人でグラス干していて
足るを知る分源泉で差引かれ
生きて居ることに意義あり葱坊主

和歌山市　井上マサ子

断ち切れぬ思いひとり部屋に泣き
お互に弱身の過去はふれず生き
この水もヘドロの海につく運命
お喋りが無口となって恋してる

和歌山市　吉野冨子

離婚歴秘めて佗びしい寡婦の旅
復縁の話へ心乱れる夜
母の日も子供主体の暮し向き
手腕家じゃ無いが勝気に生きる寡婦

東京都　宮崎美津子

神々の御手巧みにみどり織る
沢庵の歯ぎれここにも小さな幸
もっともな顔して試食食べ歩き
六三三四やっとここに初月給

東京都　山根白星

ライバルの手に握られている手形
違和感に浸り手酌の急ピッチ
紫陽花になまじ女のしるしあり
会えばもう語気のやわらぐ腐れ縁

大阪市　秋田茂

風雪に耐えたおやじの細い肩
敗れてもマイペースという云いのがれ
目の前にある倖せを見失い
本当の愛は無言の中にあり

和歌山市　秋月宏方

失恋という青春の不発弾
春の季語にもうなりきったストライキ

壺坂寺

石楠の花に坂道迎えられ

石川県　同村花仙人

おしゃべりと無口で仲のいい夫婦
ぽんぽんと言う女医さんにある人気
フイルムが残ったそうで撮ってくれ

伊丹市　樫谷漫柳

一生をひと先ず区切りドック入り
悩みごとでもあるのかと担当医
パジャマにもファッションがあり女子患者

羽咋市　三宅ろ亭

凡くらに徹することの難しさ
定退の眼輪廻を意識せず
千金の慈雨千金の宵濡らし

尼崎市　中谷利美

聞えない素振りも仲居板につき
総入歯だとは知らないご献立
一生の不作は口にせぬ夫婦

堺市堀畑奴凧

円空とともに寝起きの旅の宿
口紅に心があるのか濡れている
峠道故郷の風が吹いてくる

岸和田市　池田香珠夫

半分はパパに聞かせて子を叱る
捨ててきた猫に帰宅を迎えられ
食べて産むだけで生きてる篭の雞

寝屋川市　江口度

お返しのうるさい叔母から来た祝い
しゃべってるか食べてるか妻の舌
高額の解答会社持つかしら

宝塚市　吉田とんぼ

春の陽もとどかぬ外来待合室
俎板の鯉ならハネる透視台

言葉とは違う心の広さ知る

島根県　槻谷一葉

トゲを持つバラの弱さを見つけたり
張りつめた糸を誰かに切ってほし
流されてばかりいるけどこれでよし

豊中市　安藤寿美子

夕焼に引ずる足の重いこと
あの雲の下はふるさとれんげの田
風雲急猫は廊下へ投げ出され

和歌山市　内芝としよ

酒云わす言葉も女は信じたい
若い日の血潮でアタックしたい方
布団干す女は小さな幸に生き

今治市　伊藤一郎

CMはどうあろうとも財布閉め
何時までの命と笑う貯金帳
地方祭昔は鯛が安い時期

鳥取市　大塚豊生

底力秘めた赤字へ投資する
揉みほぐす母に甘える里帰り
吹き降りの傘に花びら持ち帰り

和歌山市　津田与史

五分の魂無くて惰力で生きている

年の故と云う言い訳をまた使い
いらだたしい世なり一息つくつつじ
大阪市　横地正彰

有難う郵便局の窓で聞く
菊のある世に生きて来ていつか老い
一言が気づかず相手を刺している
鳥取県　福田保子

甘言である日の母は子をおだて
赤字には触れずベッドの母見舞う
微笑んで焦りは顔に出さずおく
七尾市　松高秀峰

血圧を忘れ酔いたい時もあり
逆境に育ち一筋通ってい
インフレに触れて晩酌うまくなし
和歌山市　沢山福水

打解けた振りで解けない初対面
出る釘になって打たれる覚悟の日
母なる大地勿体なくも休耕地
高槻市　竹内花代子

あぶり餅次の休みを聞いて置く
春闘の人質にされ歩かされ
奈良にて
万灯篭さわれば落ちる程に朽ち
吹田市　藤原世死春

旅馴れて駅弁買うにもあわてない
拾ってくれよと子猫つきまとい
出来過ぎた句なり盗作への不安
柏原市　小谷葉子

旅のひと太い絆をおいて行き
水中花迷える心見のがさず
ひと色に絞って夫婦の微笑かな
大阪市　堀口欣一

ゼネストにもう馴れている不倖せ
村芝居飲むこと食うことしゃべること
今治市　渡辺伊津志

鯉のぼり空の広さを音にする
春菊のこの煮え加減母達者
橿原市　西本保夫

平社員庭の手入れも妻まかせ
初対面平社員とは思うてず
須賀川市　平栗金太郎

青春を削る受験の子を案じ
牡丹見か見せに行くのか訪問着
新潟県　高野不二

足場まで作って知事の任期終え
趣味のない父にせめての酒があり

白昼の掟に夫婦たじろぎぬ
人妻の仮面を剝ぎにきた妬み
備前市　武内雅堂

長生きの秘訣は嫁に逆わず
会者常離悟れば来る日もまた楽し
名古屋市　大林曲ん手

手内職あはらしいけどやめられず
昨日孫今日は息子の来るを待つ
寝屋川市　福富隆子

他人なら冗談一つも気にかかり
草の意地岩の割れ間に生きつづけ
新潟県　市川一峯

胸の中空っぽにして星の降る
忘れた振りして哀しみに耐えている
島根県　松本文子

振返る暇もありゃせぬ三十路
笑わば笑え蟻とキリギリスだ内職す
出雲市　谷口あきら

マイペースで行かう僕の持ち時間
五十路まだ見果てぬ夢を追い続け
愛媛県　小山悠泉

三代目祖父の足跡大きすぎ
東大阪市　崎山美子

金屏風もてあましてる三代目
大阪市　平井露芳

家計簿の赤字も電卓弾き出し
モナリザのそっくりさんまで出るブーム
鳥取県　林露杖

言いすぎたあの一言が悔まれて
言い勝って牡丹崩れる庭に佇つ
豊橋市　鎮浪翠月

代筆とはっきりわかる女文字
折り返し地点会社の門を出る
鳥取県　福田陽山

アンケート老の頭にもて余し
老夫婦支えられつつ今日も暮れ
今治市　大本バット

火傷する程も燃えないうちに逃げ
教育勅語出番が近い世の乱れ
今治市　今井松花

手を振って足を伸ばして見たい春
低利息誤魔化すようなクジを付け
米子市　江原良二

春宵は思ひあぐねる事許り
甘言の誘い臍繰りまでも出し
岡山県　長尾保

平和です父のいびきのセレナーデ
八戸市　安田勝己

やりくりが底つき果てた物価高
八戸市　安田勝己

メーデーの波へ路傍の石となる
鳥取市　勝山紫宏

定時制ラーメンの温さ胸に抱き
鳥取市　勝山紫宏

人並に伍して行くのに鞭が要り
大阪市　鈴木朋子

下心有って叱言がきつくなり
大阪市　鈴木朋子

走る雲負けじと泳ぐ鯉のぼり
松江市　梅本登美也

落ちてなお紅き椿を知る女
松江市　梅本登美也

青年の怒り政治に虹がなし
大阪市　新川貞祐

子の息に親の息足すゴム風船
大阪市　新川貞祐

トーストに解放された宿の朝
和歌山市　仲原己恭

春闘のあげ巾程も出ぬ年金
和歌山市　仲原己恭

さくらんぼつまんだ指に魅せられる
姫路市　大原葉香

言葉撰る間に喋る人喋る人
姫路市　大原葉香

紙バッグ旅を気軽うもちかえり
岡山市　岡英好

タコ焼の匂い祭をかきたてる
岡山市　岡英好

思い出に仕舞っておきたい電話切る
島根県　宍戸千草

女と会うセフティマーク確めて
島根県　宍戸千草

円満な報告持って母帰る
高槻市　山田スミ子

どうせなら素直に妥協すればよい
高槻市　山田スミ子

切株で今も小鳥を聞く故郷
松江市　岡崎雪美

理解ある父ではあるが金がなし
松江市　岡崎雪美

アクションで声のまずさをカバーする
岡山県　山田止水

枝ぶりについ手が伸びる花鋏
岡山県　山田止水

父サンが乗ってるらしい雲が行く
岡山県　白岩文衛

のんびりと見える蝶にもくらし持つ
新見市　吉田落猿

神官の真似で玉串奉る
青森県　荒田つる

裏切りも時効となって仲直り
大阪市　大国たかし

華道展花より衣裳に気をつかい
島根県　岩田三和

泳ぐなら田舎の空だ鯉のぼり
富田林市　奥井春子

ロープウェー見ている裡はこわくなく
河内長野市　井上喜酔

去って行く姿へ再起だけ祈り
赤穂市　谷口赤童

五月雨のあがりを待ってる風車
出雲市　藤井清月

倖せは遠い昔を刻む音
兵庫県　高橋近江

貫禄といわれ贅肉持て余し
今治市　真山国彦

小児喘息哀れや白衣恐怖症
今治市　古野伶人

母の夢一女に着せて撮る写真
堺市　栗本藤持

帳尻が合わず昼のソバが伸び
寝屋川市　井上武松

満開を誇った花も風に負け
泉佐野市　大工静子

節くれた指に似合わないダイヤ
尼崎市　大垣たもつ

倒産のない春闘へ憤り
大阪市　花田繁子

同窓会愚痴捨て合って若返り
大阪市　内藤ますえ

愛情が風化しそうに離れ住む
大阪市　須浦つね

薄命の佳人思わす桜花
大阪市　浜西駒子

三本松めぐり合ったがうれしくて
大阪市　村島秀村

満開のさつき恋しや浅香山

昭和49年度兵庫県文化祭

兵庫県民川柳大会

▼一人一句　雑　詠（未発表のもの）
▼応募資格　兵庫県内在住者または在勤者
▼作品発表　9月23日午後一時
▼会　場　神戸市生田区下山手通1の10　生田神社会館
▼応募注意　用紙は葉書。裏に川柳、郵番、住所、氏名、電話。（在勤者は勤務先明記）
▼表　彰　優秀作品に呈賞
▼応募締切　7月31日（当日消印有効）
▼あてさき　〒650神戸市生田区下山手通5の1　兵庫県県民課芸術文化祭係　兵庫県民川柳大会

主　催　兵庫県
共　賛　兵庫県川柳協会
　　神戸川柳協会

下村梵編集

『武玉川』第十七集

例によって豪華な執筆陣！
―長句と云い　短句という
拠るところは　一にして　（梵）
季刊　年四回発行　送料共一ヵ年八〇〇円
〒九五〇　新潟市船江町一丁目六二
武玉川文芸社　下村　梵

同人吟

秀句鑑賞

——前月号から——

橘高薫風

点点点線になるのを好まない　山川阿茶

点が連なれば線になるのだが、点そのものは尾を引かない。惰性を嫌い感傷を排するのである。女性で最高の学府を極め、生涯独身で通した作者の生き方、信条といったものがこの句に表現されているような思いがする。

無作法にお茶を戴く桜かな　正本水客

静寂な庭に桜一本、あたりの景を引締めている。この句の桜は、そうした格調高い桜であるようだ。作法に則らず我流で戴くお茶はくったくのない旨さ、だが、桜に見据えられ、笑われているような気もするのである。

亡妻を恋う郭公が啼くように　工藤甲吉

作者の心に郭公が鳴いている。単調なる鳴き声を繰り返し繰り返し。ひたすらにひたすらに。

人妻を好きと酔うてもいわぬ齢　阪上十止庵

五十の坂も過ぎて一かどの分別も備わった。以前には酒を飲んでの冗談ごかしに「奥さんはお美しいから、ご主人は仕合せだ。」などと口にしたものだ。はしたないことだった。

春の宵お前理屈が多すぎる　谷垣史好

春宵一刻値千金と昔の人も云ったじゃないか。この自然の雰囲気に溶け込み給え。と云うわけで、女房への言葉ならば、「女と云うものは」の意になり、友人へならば、「酒がまずくなるよ」の慨嘆になる。

「したたかな女スルメで酒をのみ」も佳句

全身で登る断崖蟻が這う　板尾岳人

命綱を頼りに一寸きざみによじ登る崖、ふと見やると蟻がいとも易すく上り下りしているではないか。蟻だって砂がこぼれれば、即ち転落なのである。真剣なる自然の営みよ。

愛情を催促される年となり　奥谷弘朗

年をとると何でもが億劫になる。愛情までを催促されるというのは一つの見つけどころだ。

微熱押して左遷の辞令拝受する　野田素身郎

宮仕えというものは、サラリーマンと云うものは、左遷の辞令もかしこまって受けなければならないのである。しかも微熱を押して出社してである。上の句が効果的だ。

一〇円の葉書大層なことを書き　村上春巳

葉書の十円が安いと思う程小さい字で一杯に書いてくるのもあれば、人生の岐路ともなるような重大事を云って寄こすものもある。嘗て陛下のお召しに応じた赤紙というのもあったが……。

花の種まいて尼僧の恋埋ずむ　高橋夕花

尼僧が恋をした。成就させてはならぬ恋である。花の種を土中に埋めるようにこの恋情をも埋めてしまった。やがて種は芽を出し、美しい花を咲かせることだろう。それは、尼僧の埋めた恋の花なのだ。

札つきになれば云いわけせずにすみ　本間満津子

誰でも何でも、云いわけをしているうちは小者なのであるというのだ。軽い表現ながら深い穿ちがある。

我慢にも限度トースターのパン跳ねる　川崎秋女

トースターからパンの飛び出す様を「我慢にも限度」と云ったに過ぎないが、実にぴったりした表現なので、思わず笑いを誘われる。

献酬の攻防戦の膳につき　鈴木村諷子

攻防戦が良かった。「末弟に親を見させて名士なり」の句も辛辣に人間性を訴えている。

冷凍の魚をもどす春の水　野呂右近

「春の水」のこのようなうまい使い方は今まで見なかった。川柳の春の水だ。冷凍魚も心地よかろうとまで感覚させる。

百人一首と川柳（1）

富士野藤馬

序

嘉禎元年（一二三五）に、藤原定家が選んだ「小倉百人一首」は、江戸時代に歌カルタになって一般に普及し、民衆に親しまれた。また江戸人は、川柳をよく作りたのしんだ。それには当然、この「小倉百人一首」が句材にもなり、おもしろく詠まれたのである。

江戸人は、いろいろの書籍も読み、また軍談や伝説などもきいて、この百人一首の歌をそらんじ、それらを上手に使って、おもうままに、たのしく川柳に詠んだ。その句々を拾い集めて分類し、それぞれ百人一首の歌と対照列挙して、微笑を感じるのである。

その百人の作者の素性にもちょっと触れ、歌と川柳とを併せて読んでみると、奈良朝から鎌倉時代までの世情をのぞき、江戸時代の市民風俗・思想もうかがうことができておもしろい。それはまた、研究的にも、興趣的にも意義のあることであろう。

小倉百人一首

「百人一首」というのは、歌の作者百人を選び、その百人の作歌のうちから一首ずつ選び、合わせて百首を集めたもののことである。その最初のものが「小倉百人一首」である。

この「小倉百人一首」は、藤原定家の選んだものと伝えられている。定家は、後鳥羽上皇の命によって「新古今集」を撰んだが、それには上皇も関係せられたし、撰者も定家のほかに、通具、有家、家隆、雅経の四人が加わっていたので、自分の意とするところが充分に実現できなかった。それで別に古今の歌のうちから、一人につき一首ずつ選び、これを色紙に書いて、小倉山荘のフスマに貼って置いたのである。後、子の為家が、それを取りまとめて「二条家の歌風の拠所」としたのが「小倉百人一首」である。

小倉山十万両が物を書き　玉章（三四31）

山荘で三千百字御えらみ　鼠六（一四六9）

五十四は石山百は小ぐらやま　乙（一二九15）

六十は月夜時雨で百えらみ　錦鳥（四九3）

月夜は作り時雨にはえらむ也　三交（二八30）

―源氏物語は紫式部が石山で書いた

この百人のうちには定家も入っているので、

九十九はえらみ一首はかんがへる　（二一22甲）

九十九は古歌で一首はあたらしい　（二二19）

などと川柳に詠まれている。

百人の順序、天智天皇を一番に、順徳院を百番にきめられたのは後のことのようであり、流布本に作者の画像を描かれたのは、またずっと後である。

百人でおもて八句へ四季を入れ　（一八38）

百人首絵の出来たのははるか後　（五15）

絵がないと男女の知れぬ百人一首　（八41）

百人一首末へ行ほど身もんだい　（拾四22）

中ほどへ定家女郎屋ほどならべ　松歌（二八13）

百首の中に恋の歌が四十三首あり、百人中女が二十一人、僧が十二人ある。

七十九男で二十一女　川長（二四37）

男七十九女が二十一　三朝（一六三26）

精進が十二八十八魚類　加雀（三六18）

また百人中、親子が十八組、兄弟が一組、母というのが二人ある。

兄弟も親子もならぶ百人一首　シクト（三六32）

百人首養父一人りに母二人り　三朝（一六六1）

おふくろを二人定家はすへて置き　里家（三三10）

そして、関を詠んだのが三首、有明が四首と、川柳作家はよく勘定している。

敷島の百里の道に関三つ　木賀（八三12）

百人の中へ関所を三つすへ　一徳（三六15）

百人に有明たった四つなり　和里（四六15）

有明は四つ一ト声ほととぎす　竹子（一五四21）

梅と鶯の歌がないというので、

鶯も蛙も鳴かぬ小倉山　賤丸（五六8）

鶯はいぬ筈梅のない小倉　文和（一五七16）

鶯も梅も小倉にかこちがほ　自慢（一四〇28）

百人は言葉もかけぬ花の兄　木葉（四九35）

百人のうち法華経の詠人なし　水鏡（一〇六8）

百人ながら法華経は読まぬなり

富士野鞍馬柳歴

明治二十八年　十月十三日京都市生、本名安之助
大正　五年　紫川柳社創立、柳誌「むらさき」刊行
同　十一年　川柳久良岐社幹事
昭和　四年　番傘川柳社同人
同　九年　句集「川柳鞍馬集」刊行
同　十年　「川柳講座」久良伎と共著、文芸情報社発行
同　十四年　大日本文学報国会川柳選者
同　二十一年　静岡川柳社顧問、静岡NHK川柳放送続く
同　二十八年　東京番傘川柳社会長、「川柳東京」刊行
同　三十年　京都川柳連盟顧問、京都NHK川柳放送、京都新聞柳壇選者
昭和三十一年　京都市長より表彰
同　三十四年　句集「人生譜」刊行
同　四十二年　川柳人協会より川柳文化賞
同　四十六年　阪井久良伎の碑建立、「久良伎伝」刊行
同　四十八年　氷見市に句碑建つ「ちる桜また来年は咲くさくら」

古川柳研究は全国各誌に連続発表
自画賛作品は随時応需

赤楽（一一五17）

―法華経は鶯

と川柳になっているが、貫之の「花ぞむかし」の花は梅を詠んだ歌である。

古里へ隠した梅を定家入れ　木賀（九一1）

人はいざ白梅匂ふ小倉山　杜蝶（五九1）

この「小倉百人一首」は、定家の権中納言時代、嘉禎元年（一二三五）七十四才の時選んだと推定されている。

これが歌カルタになって普及し、今日なおつづいているのである。

百人を五六人して追まはし　寛奴（四〇13）

百人首二つにわっておなぐさみ　（六20）

古歌を百よんで仕舞ふと畳也　秋江（勢初12）

二百枚あるとカルタも品がよし　花菱（玉25）

ひんのいい勝負場中にたった百　高砂（宮四21）

とそのカルタ遊びが詠まれている。

東郷元帥と野迷路大人

岩本具里院

―編集部宛―

前略―野迷路先生の〝金婚シリーズ〟が始まりました。私は先生の大ファンです。そのまた大先輩の東郷さんをすぐ近くで拝見したことがあります。

確か山県有朋の国葬を青山斎場にて拝観した時のことです。多くの貴顕紳士が自動車で続々と到着する中で、東郷さんが人力車から降りられ、どこかのお婆さんに丁寧に頭を下げて挨拶されている処を私から見られていた訳ですが、当時神様のように慕われていた東郷さんが、一介の好々爺で、ニコニコと、極く自然に挨拶されているのを見て、まるで電気に打たれたように深い感激を覚えました。今から四十七、八年前のことですが、その一トこまが今でも絵のように私の印象に残っています。

私には、その東郷さんと野迷路大人が二重写しになって見えるのです。多寡が川柳の会に出られて、少しも偉ぶろうとしない、それでいて自然にそこに居られる大人が余計尊く見えるのです。私がガラッ八だから、そのように感じられるのかも知れません。次号を楽しみにしています。

今の学生はトウゴウ、ダイラ、ハチロウとぬかすやつが居るそうで（東郷平八郎）まことにケシカランことです。

＊

島根県芸術文化祭協賛

第4回島根県川柳大会

日　時　七月二十一日（日）午前十時

会　場　島根県民会館

課　題　各三句以内

「箸　枕」　柴田午朗選

「地　価」　尼子緑之助選

「自　由」　津川紫吻選

「演　技」　藤井明朗選

「距　離」　古割舞吉選

会　費　出席者三百円、投句者二百円（県内外の川柳作家もご参加ください）

締　切　七月十日（必着）

投句先　松江市西茶町七〇　島根県川柳協会事務局

主　催　**島根県川柳協会**

水煙抄

秀句鑑賞

——前月号から——

西尾栞

考える人のポーズの猿も居る

山根白星

ロダン作、考える人のポーズと、離れた一匹の岩の上の猿、イライラ、あくせくする我々は猿に負けたような気がする。比喩の句としては全く旨いものである。作者は曽て、川柳雑誌時代の東京支部長として活躍された方、うべなるかな。

姿見の私はなんというだたし

川上富子

姿見の前に立ったときの自嘲の句であるが、なんと、が迚もよく利いています。

水染めて動かぬ鯉の群へ立ち

竹内花代子

叙景川柳としての典型的なものです。錦鯉の赤、黄、白、が水染めてという一語で全く清冽な水と、動かぬ鯉と、それを飽かず見つめて動かぬ人とが、うまく叙景されている。

墨滲むそこが値打ちの書道展

中谷利美

中七のそこが値打ちのという言葉が、所謂川柳として活きた句である。

信号無視して来たような過去でした

吉野冨子

この作者の四句とも、全く共感する句であるが、最後のこの一句最も佳吟である。女心を一途に生きて来た女丈夫的なとこも伺われるが、どこかに淋しいとこも偲ばれる句。信号無視とは、この作者にぴったりの言葉かも知れない。述懐も且々として気持が良い。

戸惑いを自動扉が引き受ける

元就の教え羨む核家族

マジックで無造作に値上げされ

岸本豊平次

第一句の引き受けるが面白い、所謂川柳味。第二句、毛利元就の三本の矢の故事であるが、それは、陳腐だけれど、座五の核家族で救われた。中七の教え羨むは推敲の余地充分あり。第三句、マジックは勿論手品ではない、マジックインクであるが、この頃の値上げは全く手品のようである。散髪屋へ行くと鏡の下のはしに、この通りマジックで一、二〇〇円と書かれたメモ大の紙が貼ってあった。

駅員の造った花壇がほほえまし

藤原世死春

駅長以下四、五人のローカル線の駅を彷彿とする。ここの駅員さんはみな親切な人であろう。花壇の花は大輪の花ではなく、これでも花かという全くほほえましい可愛いい花である。ついでながら作者の雅号であるが、死の字は貧い。昔、宮武外骨とか寒川鼠骨とか、いう名が流行ったが、それはそれなりとして、起死回生の心算だろうけれども、死は史に通じて、史の方がよいのではなかろうか、一考を願う。

旧交を温め過ぎて床に臥し

栗和田清子

僕にも経験がある、同窓会か何かの翌日だ、二日酔いで頭が上らず、胸はむかむかする。そしてタクシーに乗ったことまではおぼえている。この句の下五の床に臥しは時間的に一寸長すぎるようだけれども、作者は女性だから、ご主人のことを詠まれたのであろう。

目録に耕耘機一台太く書く

田沢務

嫁入りの荷物も、世につれて変っていくものですね、然し乗用車一台より、遙かに、耕耘機一台の方が川柳味があって、ほほえましい。東北ならではの一句ですね。どうぞ、おしあわせに。

☆

▼前号訂正—P37中段8行目は「白椿心ゆるして雪にとけ」（高橋夕花さん作）

こわかった路郎先生

戸田古方

1957—7月2日・左・葭乃先生
中央・路郎先生（生々庵氏誕生日記念）

先生のご本名は麻生幸二郎。いつも雑誌の奥付で拝見し、存じ上げておりました。ある日、先生ご自身のお口から

「姓名判断からいうと、本名の幸二郎はとてもおとなしい性質なんだそうだが、雅号の路郎がつくと、エネルギッシュというか、えらい勢になる。それこそ、一歩も半歩も、自分の考えを譲らないのだそうな。」

姓名判断如きを信じられる先生ではありません。私もそんなことは余り気にしないのですが、この幸二郎と路郎のちがいだけは、今はやりの超能力ではありませんが、不思議によくあたっているのです。

先生のご性質は実にやさしい、親身になって考えて下さる。おいとしみ下さる。ご親切なんです。これは先天的とでも申しますか、先生に接した旧不朽洞会員、即ち弟子達一同誰しもが確と存じ上げております。

だが、いったん、句の話になるとガラリと変ります。実に厳しいお方になられました。先生はひとりひとりの個性を伸ばし、作者が名乗らなくとも、句を耳で聞いただけで、それが誰の作品であるか分るような作家に仕立てて下さいました。豆秋しかり、丹路しかり、鮎美しかりでした。弟子達は安心して、先生のお育てにすっかり素直にお委せしていました。先生なきあと、現役の同人の句にも、残念ながら各々の個性が少しぼやけていやしないか、この頃の作品を見ていますと、もっと先生に生きていていただいて、ご指導を受けたかったと思わずにはいられません。

先生はそのご一生を川柳の社会化に献げられたとご自分でも、始終おっしゃっていられました。私は昭和十三年に入門しましたのでその全貌は存じませんが、戦後に大阪市文化祭市民川柳大会が例年催うされるようになった頃です。私は川柳雑誌社を代表して各社の方々とその下相談の集りへ出席いたしました。集りがすむと、きまってその足で直ちに先生のお宅をお訪ねして、その結果を申し上げるのです。

ですが、この時ほど、毎回のことですが、先生をこわいと思ったことはありません。私はいつも口ぐせのように、叱られに行くこの訪問を「台風よりこわい」といっていました。何ですか、毎年のように台風が来ている頃でした。がその台風よりビクビクものでした。

何をどう先生に叱られるのか。

「大阪市が税金をつかって催してくれる市民川柳大会じゃないか。こんなことで、どこに市民の啓発があるか。市民の大会があるの

か。ただ既製の川柳作家が年中行事のように各社から集ってきて顔見世するだけじゃないか。全くの市民不在。お前は一体何を相談して来たんか。」

実にすごいけんまくでせめつけられます。時には馥乃先生がおとりなしをして下さったこともありました。

本来掛け合いごとの不得手な私、私も私なりに考えがないわけではないのですが、仲々取上げてもらえません。理想だ、空想だと相手にしてもらえません。第一、市から出る予算の如きもそれほど多くないので、ついお座なりに、お茶を濁してしまったのかもしれません。ポスターのスポンサーに北浜筋の名を出そうとしたり、「証券の民主化」という兼題を交換に持ち出された時なども、それが先生のお耳に入ると、とてもでないご立腹。

「川柳は株屋の召仕えではない」

という調子でした。

その後市の社会教育課で企てられた成人学校の講座の中に川柳が数回取入れられたことなどありました。そういう先生のお声がやや前向きに取入れられたからかもしれません。

だが、見ておりますが、川柳講座はその後ずっと途切れているようです。

先生はご自身の意見と違う席へはだだっ子のように出席をこばまれたりしました。

いつでしたか、この市民川柳大会が、心斎橋の大丸で開かれた時、どうも会の方針がお気に召さなかったのか、大丸に近い所にまでおみえになりながら、会が始まろうとするのにお顔をお見せにならない。会の方では先生の出番が用意されていて、プログラムにはお名前が出ているのにお見えにならないので世話人一同は困りぬいたことがありました。全く、皆で綱をつけて会場までおひっぱり申したようなことも思い出されます。

先生は川柳の社会化に一生を献げると申しましたが、それじゃ、見るほどの効果が上ったか、と申しますと、お見受け申した処、手離しで「イエス」とも申し上げ兼ねます。長年川柳に親しんでまいったものとして愈々川柳の難かしさが分るような気が致します。

短歌や俳句がマスコミにどんどん取り入れられている半面、川柳が隅みっこの方に追いやられていることも川柳するものにとって残念でたまりません。短歌、俳句と並んで川柳が取り上げられる日がいつくるかと毎日思っている私もその一人です。

馬を川まではつれてこられても、飲みたがらない馬に水を飲ませることが出来ないと申します。仮に課題を出して公募しても、応募してくる数は極めて少数です。

川柳はギャンブルのような功利もありません。感能的な楽しみもありません。地味といえば地味です。

何が人をギャンブルに狩り立てるのでしょうか。何が人を感能に赴かせるのでしょう。歌の文句ではありませんが、心の憂さを捨てようとしてるんじゃありませんか。

しかし、ギャンブルや感能で果して憂さが捨てられるか。多くは宴の果てのより深い哀愁が残るだけではないでしょうか。

詩は限られた人のみが味うことのできる世界かもしれません。その人のもつ人間の巾と深さから溢れ出る。そんな余裕があるものかという人が多いのでしょう。しかし、詩作の後にはギャンブルや感能の後の虚しさのないことだけは確かです。

書き止められた詩は、ものにもよりますが、絶えず繰返して鑑賞することができます。

そして、その詩作に際して、あらかじめ持たねばならぬ教養や約束事が少くてすむとすればどうでしょう。短歌や俳句も確かに時間的、経済的にも余裕のある人達だけの世界かに見えます。年毎に日毎に忙しさを加える今日此頃、それどころではないとおっしゃるでしょう。しかし、そういう何の用意もいらず飛び込める詩があったらどうでしょう。川柳

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資
会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (06) 三四五二―四
夜間 (06) 四四〇八

はそういうものではないかと思うのです。

川柳を嘗めると、そんな諷刺や洒落や奇智がないとかぶりを振る人が多い。話は聞くけど作句はという人もあるでしょう。

だが、路郎先生は「川柳は人間陶冶の詩」といわれました。「人生批判・社会批判の詩」ともいわれました。「人間陶冶」は「幸せになる」ということであり、「人生批判・社会批判」とは、生きている限り、何らかの不平不満を持っているから出来るのです。通じていえば「人生に不平や不満をもっている人はその不平や不満を手蔓として幸せになれる」ということになるのです。

川柳に長年親しんできた殆ど全ての人々は申します。無事平穏で満ち足りている時にはいい句が生れにくいが、何か思うようにならぬ不如意にぶつかると思いもかけぬ作品ができるとも申します。路郎先生もいっておられました。「腹が立ったら句にするんだ。」と。「ものいわざればはらのふくるるわざ」という徒然草の兼好のいった言葉は永遠の真理でした。川柳はそういう詩です。

そして、わざわざおかしさを誘わなくとも、自分のそうした反省なり、心の解剖や分析を試みた時、その中に無限のおかし味や笑が秘められていることに気が付くでしょう。

不平や不満がない人はいないとすれば、誰にだって川柳は出来ます。それとぶつかりさえすればよいのです。

さらに、人類の理想や夢にもふれて行けるのも川柳です。人間不信も川柳ならこそ解消させることができるのではないかと思われてくるのです。

先生がなくなられて十年がこようとしています。先生なきあと遺髪をつぐ川柳塔の十年を今迎えるにあたりまして、こわかった先生の思い出の数々にふれるにあたり、先生のヒューマニズムを烏滸がましくも分析させていただきました。先生はこう思っていらしたのではないかと、一つ一つ反趨してまいりました。

とてもおぼつかない弟子の私達、遅々として捗りはしますまいが、より前向きに、よりエネルギッシュに川柳の社会化に立ち向って、文字通り遺髪を継がせていただきたいと思わずにはいられません。

一人の作家を育て上げるのは大変です。育てるというより、ご縁があって川柳へ近づいてこられた方を、諦めさせず、牛の涎れといたいけれど、いつまでも作句を続けて下さるよう努力しましょう。伝教大師のいわゆる「一隅を照す」光の輪を拡げましょう。先生のみ霊が乗りうつったように日本中を川柳を通して陶冶してまいりましょう。前むきに歩けば影はひとりでついて来ます。マスコミも取り上げずにはいますまい。あるところまで伸びればあとは雪だるまみたいに育っていくことをひそかに期待しながら。

それは常連というか、すでに育ってきた作家ひとりひとりの責務です。ことに路郎門の縁につながる弟子に孫弟子、ひまご弟子のみなさん、みなさんの頭に路郎先生の御名が少しでも残っている限り、肩組み合って、腕組み合ってゴーイングマイウエー、この道をまっすぐ前進しようじゃありませんか。

一分間の柳論

小浜牧人

最近川柳家の間に現代の川柳の姿勢が色々と論ぜられている。この論議の中から川柳の前進向上への何らかの指針が得られるならば大変結構なことである。然し中には互に足を引っ張り合うような批判や中傷的な言葉も耳にするがこのような事は慎しむ可きで川柳の進歩にはつながらない。

伝統、革新等と位置づけて句を論ずるが川柳の本質は路郎先生の「人間陶冶の詩」この言葉に尽きると信じている。この本質を確と胸に刻み付けておれば伝統句も革新と称する句も川柳に変りなく一つ篭の中のリンゴである。安易な発想に依って使い古されたあり来たりの表現で同じような作句を繰り返していては退屈する許りであり、ロジックの合わぬ言葉の羅列に過ぎぬ句や感覚に溺れた自己満足の句を以て革新だ等と言っていては徒らに混迷を深めるばかりである。

時代の進展に応じた新鮮な感覚で句想を捕らえ現代人の胸に響く判り易い表現を練って作句する事が即ち川柳の前進になるのではなかろうか。

古稀祝賀川柳大会の麻生路郎先生

三度笠はやめときや

不二田一三夫

うちの人や他社の人たちからも、路郎先生は〝おっかない人〟ということになっていた。ぼくは八年数カ月、先生のおそばで仕事をしてきたが、そのような恐怖心を一度も抱いたことはなかった。（辞められたら困るというご遠慮があったのかも知れないが……）

主幹とか、編集長というのは〝おっかない人〟が多い。もともとペンで食ってる人は、すべてが辛らつのようで、ニコニコえびすなんて人はいない。若いころ、編集屋のタマゴとしてずいぶん泣かされたことがある。

ちょっとでも文字をまちがえると、そこにおられないような辛らつな皮肉が返ってくる。たとえば「書斎」を、「書斉」と書くと「キミンとこは〝ショセイ〟というのかね」

万事がこの式だ。

「松竹映画の穴埋め百二行だ」

「ついでに日活映画も七十六行――」

左右のデスクからいっときに云われ、

「今スグですか」と聞こうものなら、

「うちは月おくれの雑誌を出してるんじゃないんだぜ」

もうちょっと、なんとか云いようもあろうにと、くちびるをよく噛んだことがあった。

路郎先生も、はじめはそのような人かと思っていたが、柳誌では、そんなエゲツナイことを云ってては編集部員がつとまらないのだろう。

故白柳さんがよく云っていた。いくら苦心して組んでも、みなやり直しさされるので、みんなケツ割ってしまう――と。

先生は広告の入れる位置や、左右のページのバランスにはとくにきびしかった。これは当然のことで、レイアウトの常識である。そしてページの末尾がポカンと白くあいているとこへカットでゴマ化すようなことは絶対に避けられた。これは「川柳塔」にまで受けつげられているのである。とにかく編集に関するかぎりはうるさい先生だった。

このことだけは今だに不思議に思っているのだが、先生は原稿用紙へ文字を埋めていくのがトテモ苦手のようだった。片ザラの紙を全紙三十二切にしたものへ、小さな文字で書かれていたのである。（この紙は雑詠の清記用だった）だから、こちらへ原稿が回ってくると、それをいちいち数を計算しないと組めないわけだ。原稿用紙なら一枚、二枚で計算するから時間的には早いが、この非能率的には毎月弱ったものだ。そのかわりによくしたもので、その文字たるや、活字のように正確で読みやすかったから、校正のときはスイスイとことがはこぶ。

新聞社などの原稿には原稿用紙へ書かれるが、一行が二十二、三字から二十五字ぐらいになる。文字が小さいから、いきおいそうなるようである。（水府先生は文字が大きかったから一行十八字ぐらいの場合もあった）

マス目へキチンと文字を入れようとするとペンの動きがにぶくなるのかも知れない。それとも川柳は句笺へ書き流すため、マス目には不感症になられたのかな。（これらのこと

はもう何回か書いた）

　葭乃先生の現在の筆跡は、路郎先生がそのように指導されたそうである。

「筆の人らしい文字を――」

　路郎先生はよく〝筆の人〟というコトバを使われた。文人は文人らしい文字を、ということである。事実、ぼくらでも原稿をいただけば、その筆跡でおよその執筆キャリアがわかるのである。

　その路郎先生が、原稿を書かれると、筆の人らしくない文字になる。普通人の達筆だ。これは、誤植されないようにとのお心づかいだったのかも知れない。

　かつては〝爆弾路郎〟とおそれられたそうだが、ぼくの知るかぎりでは、争いごとのきらいな人だった。ぼくの在社中に、他社から二回イヤがらせのようなことを書かれたことがあった。先生は知らん顔をされているのでこっちがムカムカして、売られた喧嘩なら買いましょうと、その原稿を書こうとしたら止められてしまった。

「ぼくのペンでは勝ち味がないというのですか」

　と食い下がったことだが、

「相手はしつこいから、ほっといたらええ」

ぼくの筆力を危ぶまれたようだった。しかし二回のうちの一つだけ、なんとか書かせてもらうことになり、二弾、三弾の原稿の構想まででととのえ、まず第一発を放った。

　だが、先方サンが無視してか、ウンともスンとも書いてくれなかった。結果は一人相撲になってしまった。

　またこんなこともあった。ぼくにある原稿を書けと命令があった。しかし気が進まなかったので他の人に頼んだところ、その原稿の頭のほうが弱いので頭だけ書き直せということだった。仕方なく頭を書いたら、こんどは尻っ尾がすぼんでしまったから尻っ尾も手を入れよとおっしゃる。また後半を書き直したところ、前と後はこれで締まったが、かんじんの中味の影が薄くなってしまったから、書き直しついでに中のほうも頼む、なんのことない結局ぼくが書かされたことになる。こんな茶目っ気を平気でする先生だった。

　ある特集号のとき、故塚越迷亭先生に何か書いてもらうようにとのことだった。しかしぼくは原稿依頼をしなかった。当然それが締切になってからバレてしまった。

「なぜ、頼まなかった？」

　ギョロリとめがねが光った。

一分間の柳論

本田恵二朗

　互に惚れおうて、世界唯一のライバル同士と思い込みおうていた男――その名は故服部十九平であるが、彼は柳縁という言を創作して川柳の糸で結ばれた友情をこよなく愛していたものだ。また大先輩故水谷鮎美氏は、川柳作句へのファイトを柳魂と名附けて、後輩指導のハッパとされていたものだ。ところが、幾年たっても柳魂だけの域で気負いたっていてはいけないと主張するのがこの私である。

　そこで私は柳恩という言を創作して、大声で唱え続けた頃がある。それは、川柳によって生甲斐を発見し、川柳の恩を感じ取る域に達してこそ本当の川柳人になったのだという意味である。川柳界に入門したことは柳縁であり、作句に精進することは柳魂であり、やがて安定した作句活動が出来るほどになるならそれは柳恩であると思う私である。

「書く人は、他にもたくさんいますから」

　ここいらで爆弾が落ちるはずだったのに、ややあって、

「あのことでか？」

　と、はじめはこわい顔をされていたが、だんだんあの度のきつい目がやさしくなって、

「キミの思うようにしたらええ」

　ということで、その場はおさまった。ぼくがなぜ、ヒネくれたかというと、迷亭先生はある柳誌へ、背文字のはいらないような薄っぺらな本は、雑誌の仲間入りができない、というようなことを書いたのである。そのころの「川柳雑誌」には背文字がはいっていなかった。――だから先生は、

「あのことでか？」といわれたのである。先生は雑誌のためには、そんなことは気にされていなかったようである。

　その後、ほかのことでカンシャクを起こしたことがあった。

「三度笠は、やめときや」

と、何かで腹を立てると、先生は〝三度笠〟を出された。―長谷川伸原作の映画や劇が当時人気があって、〝エエカッコーして喧嘩をするな〟ということである。

路郎先生が言語障害で口がきけなくなられたとき、〝面会謝絶〟の二階の病室で、「雑誌のことは心配しないでください、ご病気がなおるまでぼくがやります」と、紙きれに書いてお見せすると、先生はぼろぼろ涙を流され、「頼む、頼む」というようなゼスチュアをされ、なにかモグモグロを動かされていた。先生は雑誌発行のことだけがご心配だったようであった。

再起危うし――とまで懸念されていたのに、その後、やや小康を得られてから、ぼくは二度までも遺言めいたことをうかがった。一言にしていえば〝路郎死すとも雑誌は残す〟ということである。

雑誌を発行していくためには、広告代がいくらいくら、誌代などがこれこれ、そこから葭乃先生や林宏子さんとぼくの生活費など、こまごまと数字で示されたのである。

そして、陣容強化のため某大物氏を輸入？することだった。ぼくはこれには断固反対申しあげた。ご病気中の先生には、だれもがさからわぬという約束があったが、このことだけは先生にさからった。あくまでも葭乃先生を中心に、幹部諸氏の合議制を強く主張したのである。

「女傑のほまれ高い井上信子さん（故剣花坊先生夫人）をもってしても、この柳界は乗りきれなかった……」

という言葉のうらには、幾星霜、この道で辛苦をなめつくされた葭乃先生に、これ以上苦しめたくないという願いがこめられてあった。（ぼくはそのように受けとった）

この日の先生は、柳界をリードする鬼の麻生路郎ではなく、妻や従業員の身のふり方にまで心をくばる一人の人間の姿まる出しだった。

最後には先生と後味のわるい別れ方をしてしまったが、その頃の先生とぼくには、幹部諸氏とはまた別な〝師弟関係〟があったようである。当時〝内弟子？〟はぼく一人だけだった。

どんな小っぽけなアナ埋めでも、ご自分で目を通さないと印刷所へ回されなかった先生から、編集いっさい任されきりだったことに感激もしたし、人生その意気に感じ、ここで骨を埋めるつもりのぼくがシュガーカットのテレビのように、プツッと切ったまま、川柳から離れてしまった。

ぼくがもし、社に残っていたら、せめて雑誌のことだけはご安心ねがって、ゆっくり養生していただけたのにと、路郎忌が近づくと胸の痛む日が多い。

事務処理
書類焼く火は落城の火とも見ゆ　葭乃

生駒から

麻生葭乃

――不二田一三夫宛

前略―なんにもようお手伝いが出来ずすみません。昔は不朽洞会のボックス、購読者のボックス、贈呈のボックス、地方合併送本など一人で発送する元気がありましたが、もう

日本の梅雨に堪えるのも試練のひとつ
動物愛護　死骸食うような顔してて
桜ん坊の頸の細さよ懐しの人

こんなに老いぼれてはサッパリ駄目でございます。無軌道でも自由にエネルギーを発散する当世若者のグループを遠い霞の外に見ています。

宵宮

和海草春選

土曜日と合って宵宮からの客　魚山
宵宮には別れ別れになる金魚　右近
宵宮の灯　心の欲が影となる　凡九郎
宵宮に　浴衣も揃い　気も揃い　福水
お揃いの　ゆかた宵宮の　肩ぐるま　道子
たこ焼の匂い宵宮の道で会い　木魚
宵宮の隣りの客も子供連れ　雀蹄子
宵宮でもうなくなったお小遣い　寿美子
宵宮に連れ出す孫にある野心　祥月
宿題はあしたに延ばす宵まつり　英詩
宵宮へ軽い財布を握りしめ　隆子
宵宮へ子の肩揚げをまたおろし　カズエ
宵宮の露店へ子供吸いこまれ　紫宏
宵宮更けて晴着の寝押する　千翁
ミニの娘も今宵は浴衣で宮参り　軒太楼
宵宮へ行く気の化粧念が入り　菩句
夜更しを叱られなんだ宵祭　松花
好きな娘が居て宵宮から泊り込み　七面山
宵宮に未来を語りあうふたり　重人
宵宮をだしにデートの娘が出かけ　思月
宵宮へ何かが欲しい娘なり　与史
祈る娘のうなじが白い宵の宮　登美也
宵宮の人に流れる忍び逢い　貞祐
宵宮の女髪だけ結うて置き　一郎
宵宮に降られてでき屋酒とする　どんたく
宵宮に明日の主役が酔いつぶれ　香珠夫
宵宮の渡御あの顔もアルバイト　章雅
宵宮をもういきってる子供獅子　没食子
宵宮の巫女穢れなき緋の衣　肖二
かがり火が宵宮の川をきれいにし　無人
人出ほど宵宮賽銭あがらない　素身郎
賽銭をのぞきニンマリ宵えびす　みのる
出稼ぎの父も帰った宵祭り　好一
宵宮の露店珍らし過疎の村　藤持
宵宮が雨でつぶれた今日の混み　本蔭棒
宵宮も更けて囃子の音も止み　伶人
宵宮の太鼓に過疎が生き返り　可住佳
パンタロン脱ぎ宵宮の顔となる　宵明
出稼ぎの父宵宮も更けて着き　一風
宵宮の賽銭冷い音を立て　保夫
宵宮の同じ高さの御神燈　バット人
宵宮に遠く団地の窓暮れる　かつみ地
補充した稚児へ宵宮縫わされる　たもつ天

ご投句に

川柳塔柳箋

価　七〇円　送　七〇円

宵宮の太鼓ゆっくり飲めと鳴り　芳子

独立

若林草右選

独り立ち家賃の補助を頼みに来　章雅
独立してからの苦労は二で割れる　可住
草さえも生えぬ砂漠で独立し　宵明
独立に流した若い血を惜しむ　英好
親方の花輪一つで独立し　伶人
転んでも自分で起きる子に育て　バット
独立へ黙って田圃売った金　たもつ
脱サラの独立砂に築く城　香珠夫
独立してます屋台ひいてます　度
泣いた日もあったが今は独り立ち　暁風
独立へ故郷から花嫁云うてくる　三十四
のれん分けさせるきびしい風当り　千翁
独立のけなげな顔が寄る法事　どんたく
独立の旗に戦火がまだ消えず　代仕男

独立の苦労を話す父の懺　与史
独立の初心へ懸ける虹の橋　豊生
独立の屋台を明日へ軽く引き　かつみ
独立へ二三ちいさな義理を欠き　素身郎
独立の影に目だたぬ母があり　竹馬
夢やっとままごとのよう独立し　芳子
独り立ち告げる故郷の墓洗う　カズエ
独立の美名で老いた父母をすて　思月
独立を目ざす貯金がまた目減り　没食子
裏付けのない独立にある悩み　たかし
独立へ若い社長の廻り椅子　祥月
親の夢も入れ独立へ子を発たせ　静泉
独立心定時制の目がつぶら　重人
独立を今に今にと定退日　翁童
親の目に頼りないのが独り立ち　好一
レジスタンスと云う独立も現代児　凡九郎
独立戦争してるつもりの反抗期　寿美子
独立国どこかの国の基地があり　菩苦
独立を期待されてる子のあせり　綾女

佳

独立をしたい男に養子口　一風
兎に角も独立してるドヤ住い　本蔭棒
独立の電話縁起のよい番号　登美也
遺児抱いて小さな看板掲げました　右近
明日からはライバルとなるのれん分け　洋々

人

もう独り育ちと苺苗切られ　みのる
地
ぬるま湯につかって独立考える　無人

天

独立の出来た夫婦の巣箱です　雀踊子

軸

聖火燃ゆ産声あげた国の旗

盆

川竹松風選

隠し芸月になる盆すみだ川　宵明
捧げ持つ盆が震えている見合い　伊津志
手作りの盆に家計を支えられ　豊生
タバコ盆引き寄せ無形文化財　保夫
金文字を入れて記念の盆となる　重人
知恵のないお盆といえる引出物　古方
盆栽へ老いの丹精おだてられ　暁風
王手飛車ゆっくり盆を引き寄せる　英好
親しさは手盆ですますいろり端　暁明

○

盆の僧単車ヘルメットとはすごい　竹馬
出稼ぎの訃りが笑う過疎の盆　かつみ
仏心はなし楽しみの盆踊り　不二
初盆の妻へ手向の百合を切る　与史
仏との出合い話も初の盆　代仕男
あの人も今年は盆の人となり　木魚
盆帰えり都会の匂い撒きちらし　どんたく
松葉杖じっと見ている盆踊り　金太郎
人間に戻る社長の盆踊り　千翁
剃りたての頭で坊主が盆にくる　登美也
盆の墓僕より先に誰か来し　菩句
新仏の癖も話題に盆供養　軒太楼
出稼ぎの父も家族も盆を待ち　一風
盆帰省東京弁で挨拶し　伶人
盆帰省少しは法螺も吹いて去に　国彦
昼寝しに帰ったような盆休み　一風
名ばかりのお盆迎える無縁仏　雀踊子
麻幹たく焔に亡母の姿見え　綾女
灯ろう流しへ自分をのせてみる　静泉
盆踊り老人席は孫も連れ　没食子
死んだ子の年を数えるのもお盆　静泉
お盆には帰る気で発つ無人駅　右近
釈名の字が新しい盆の花　魚山

秀

故郷捨てた子が戻らない過疎の盆　英詩
新盆の月はさびしくまんまるい　千翁
お盆客送り仏間に母ひとり　代仕男

七月七日の大会記事を
もう一度ご確認ください
（P21参照）

初歩教室

題 —「草」—

本田恵二朗

摘み草の悲鳴は蛇の知らぬこと　本蔭棒
草笛は昔恋しい音で鳴る　同　宗義
入院の隙を草に攻め込まれ
（入院の留守を雑草にしてもらい）　貞祐
草に寝て束の間の春を嗅ぐ
（草に寝て束の間の春嗅いでみる）
（うららかさ草のしとねで春を嗅ぐ）　度
青春の讃歌草原を飛ぶペタル
（銀輪の若鮎のように飛ぶ草の丘）　三十四
草餅は明治の母の味であり
（草餅に明治が匂う母匂う）
朝の窓草の匂いがどっとくる　同
（すがしさを草がもてくる朝の窓）
草むらになに見つけたかポチ馳ける　カズエ
（草むらになに見つけたか吠えかける）
蓋とれば母手作りのよもぎ餅　同
（蓋とれば母の香匂うよもぎ餅）
草いきれ若さはそれが我慢出来ず　奴凧
（草いきれ若い血汐を湧き立たせ）
浮彫りの野立の仏草もえる　同
（草の波野仏さまがおぼれそう）　サヨ
公害の中に雑草たくましい
（雑草の根強さ公害知らぬげに）
（公害ってなあに）と雑草に聞かれ）　洛酔
雑草に埋もれ世間狭う住み
（雑草に埋もれたように狭う生き）
尻のあと草に残して二人行き　同
（尻のあと二つ残した草の丘）
極道へ草葉の陰が泣いてはる　同　良二
萌え出た草に人生教えられ
（萌え伸びる草に生き方教えられ）
お座なりに過ぎぬ煙草の注意書　利美
湯上りに女が匂う娘の仕草　同
審判に打順がまわる草野球　同
肺ガンは怖い煙草が止められず
（肺ガンは怖し煙草は止められず）　無人
雑草の花も蝶呼び蜂を呼び　同
雑草の強さ青虫よせつけず
冷戦が続いて庭の草繁る　同　静泉
根性を雑草におき子らを説く
（百合よりも雑草になれと子に教え）
根性を野草の意地に教えられ　同
（野の草に生きる根性教えられ）
前略と出草々に荷をおろし　頼次
（前略と草々ではさんだたった一行）
朝早く草木に小鳥合唱ひびかせて　陽山
（朝露の草に小鳥が話しかけ）
夏草に埋もれて眠る五輪墓　露杖
（夏草に抱かれて眠る五輪墓）
夕映えの中に草笛消えてゆく　同
（草笛の尾を曳いて消ゆ茜空）
（夕映えが草笛の音をそっと呑む）　伊津志
雑草に催促されて虫が啼く
（草たちに催促されて虫すだく）　同
雑草にしがみついてる土手の砂
雑草のように悪のはびこる世を嘆き　誓二
（悪の根の根強よさ雑草思わせる）
若草のように新入りもえている　翁童
雑草の強さで迎えた定退日　同
草野球みんな本気でエラーする　大成
見上げれば草あんなとこ屋根で生き　同
（鬼瓦のそばでのんきに草生きる）
草むしる恍惚の背へほほ笑む陽　軒太楼
浮草のあわれ仮寝の果てしなく　同
（浮草のあわれにも似て旅芸人）
草原に憩う二人は時忘れ　藤持
（草の丘おふたりさんに時がない）
草千里ガイドの唄を青く染め　重人
根なし草また転職を考える　同
春の草バドミントンの玉はねる　章弘
（草崩えるバドミントンの玉はねる）
長島も王もおります草野球　同
草原のいぶき空想まだ続き　保夫
（草原のいぶきへ空想はてしなく）
人間のエゴは花壇の草を抜き　幸生
（咲かすため草をむしるもエゴのうち）
その道が活けると草も見直され　繁子
はしご酒とどのつまりは草枕　生仏
除草機で庭の草むしり大げさな　静観堂
（庭草へ除草機とは大げさな）
草に寝て見つけた春の芽と語る　同
草茂る美田の怒りに見つめられ　かつみ

（草ぼうぼう美田の嘆きたれか知る）
雑草になって更生すると言う　同
甚句だけは横綱格の草相撲　同
根も土もつけてタンポポ掘られたり　茂美
（たんぽぽの不運心ない手に抜かれ）
バスケットみたいな得点草野球　満津子
（草野球十八対十九という接戦）
草むらで手足のばして目を細め　駒子
（草の丘大の字に寝る小さい幸）
今日もまた道草食って大目玉　ますえ
（しおらしく戻った道草叱りかね）
淀川の土手に座ってよもぎ摘み　つね
（春うらら淀川土手のよもぎ摘む）
（春の陽に誘われ土手のよもぎ摘む）　秀村
草花を色々集め庭に植え　同
（草花のコンクールですわが小庭）
堤防の青々しげる草の路　同
（土手草に散歩の下駄がくすぐられ）
日日草花きそう日の待ち遠し　つた
（草花の咲ききそう日を待つこころ）
あの草もこの草もみななつかしき　同
（庭の草ことしも元気で萌えてくれ）
草餅を好みし母にまず供え　濁水
道草も二人で楽しい共稼ぎ　同
（道草をしめし合わせる共稼ぎ）
つぎ穂ない話に雑草むしられる　寿美子
母子草ときけばいとしや抜かでおく　同
草花の苗に女は立ち止まる　同
（草花の苗が女の歩を止める）
草むしる小庭がほしい二ＤＫ　道子
すみれ草やっと見つけたハイキング　同
（すみれ草見つけハイクの心満つ）
春風に草木の新芽目を覚し　比呂路
（春風にそっとなでられ草芽吹く）

題―旅―七月二十日締切（九月号発表）

宛先　岡山県倉敷市下津井　〒七一一
本田恵二朗

路郎句碑建立25周年
久米南町中央公民館新築　記念

第26回西日本川柳大会

とき　九月八日（日）午前八時開催。
ところ　岡山県久米郡久米南町下弓削（久米南町中央公民館大ホール）
兼題と選者（席題三題当日発表）
「似　る」　中島生々庵　選
「広　場」　三条東洋樹　選
「川　」　柴田　午朗　選
「　妻　」　大森風来子　選
「ふるさと」　丸山弓削平　選
柳　話　川　村　好　郎
―投句各題二句以内。タテ22センチ、ヨコ4センチの句箋に一句ずつ明記、裏面に雅号、八月末日までに〒七〇九―三六岡山県久米郡久米南町弓削川柳社宛。出席者は当日午前十時三十分まで受付。
会　費　出席五百円（発表誌、記念品呈）投句は三百円（発表誌呈）
呈　賞　県知事賞ほか（出席者優先）
特別課題「雲」（**よみこみ不可**）**麻生蔑乃選**
秀吟トロフィー贈呈。
▼応募は3句以内をハガキに楷書、無記名清記で選をします。
▼特別課題の締切は七月末日、発表は大会当日。（宛先は前記）
▼特別課題の投句は無料。大会欠席者で発表誌入用の方は三百円別送のこと。

主催　弓削川柳社

川柳句碑建立に市長の感謝状

ふるさとは大仙陵のあるところ　摩天郎

本年五月十日仁徳天皇御陵前の大仙公園に第五回大仙公園の森の植樹祭に当り、句碑建立の簾に依って堺市長我堂武夫氏から左記感謝状が八木摩天郎に贈られた。

感　謝　状

八木摩天郎殿

あなたは大仙公園修築施設の一環として聖地仁徳天皇御陵前庭へ立派な句碑を建立されましたそのご尽力とご厚意に対し深く感謝の意を表します

昭和四十九年五月十日

堺市長　名

（**八木摩天郎**）

第二百七十六回（四十九年度第六回）

大萬川柳「焦り」入選発表

選者　川村好郎

投句総数　五百六十五句

入選　五十五句

折り返し点過ぎて人生焦るまい　堺　真沙子

割り切ったはずの焦りがまだ残り　大阪　好一

屑篭に恋の焦りを溜めている　大阪　智子

焦ってたあの頃若さがまだあった　大阪　凡九郎

愛つなぐ糸がもつれてきた焦り　貝塚　つき子

針の穴老いの焦りをつのらせる　富田林　維久子

同室のベッドが空いていく焦り　八尾　夕花

焦るなと叱った父も寝ておらず　堺　一舟

売捌くあせり不渡りつかまされ　和歌山　政夫

無口にもなろう三浪目のあせり　寝屋川　小路

なまじっか食えて女にある焦り　大阪　水客

さりげなく友の縁談聞く焦り　広島　とし

養老院焦りを捨てた日向ぼこ　島根　芳子

日本の焦り背伸びもぐらついて　松江　晃男

焦らない歩巾となった五十坂　大阪　弘生

うら腹の笑顔に焦り透けて見え　米子　千代

焦り消す座禅心に組んでみる　大阪　重人

日かげ花色褪せてゆく日のあせり　松原　サヨ

ホステスの焦り体をはっている　倉敷　素身郎

一陣の涼風焦りの頬を撫ぜ　和泉　洛酔

資金繰りつかぬ焦りの八つ当り　橋本　木魚

観世音焦る心へ笑み給う

人間の焦りを笑う葱坊主　今治　宵明

ライバルが大きく見える日の焦り

逆境の焦りへ友の手が温し　倉敷　克枝

六法書繰る指先が知る焦り

つまずいた石に焦りを悟らされ

栄転の祝辞へ秘めている焦り　倉敷　梁水

蜜蜂の焦りは花が散りはじめ　松江　登美也

答案の白紙を秒針追う焦り　神戸　どんたく

斗病に馴れて焦りも遠ざかり　岡山　千代香

ある焦り猪口から茶碗酒になり

高笑い女の焦り洩れている　堺　天笑

焦ってる顔を貸付課に読まれ

学歴が距離を縮めてくる焦り　大阪　文秋

仲良しが嫁いで母をいらだたせ

つつましい焦りデートの茶にむせる　笠岡　桃里

披露宴の招待ばかり来る焦り

娘三人一番下も適令期　門真　鉄児

信号の赤に焦心試される

焦りまたルージュの色を変えてみる　東大阪　清人

老らくの焦り残り火が萎える

思われている倖せにある焦り

労わりの言葉にもろい日の焦り　大阪　修史

佳句

栄転を送り焦りの吊皮よ　香川　酔夢

人間の焦りを山は受け付けず　大阪　一舟

二代目の重さに焦る資金繰り　和歌山　富江

あせらずにご加養　病人聞き飽きる　宝塚　静馬

上ばかり見てた焦りの転びよう　和歌山　武雄

焦っても地球の自転は変らない　大阪　清人

群集の焦りの中に僕も居て　和泉　洛酔

人ノ句

薄給でもよいかと焦り見抜かれる　大阪　あいき

地ノ句

逢いに行く焦りをコハゼにみすかされ　大阪　あいき

天ノ句

焦っても私ひとりの世ではなし　大洲　暁明

選者吟

焦心を叱り今日の一歩をたしかめる　與甦光

昭和四十九年度
ベストテン（五月現在）

一	花梢	一二、五	富田林
二	天笑	一一、〇	堺
三	文秋	一〇、五	大阪
四	梁水	一〇、五	倉敷
五	十止庵	一〇、〇	大阪
六	可住	一〇、〇	兵庫
七	吸江	九、五	藤井寺
八	暁明	九	
九	どんたく	一〇	
	凡九郎		
	重人	一一	
	静泉	一二	
	芳子	一三	
	小路	一四	
	弥生	一五	
	緑水	一六	

学習考

吹田三郎

「学問の自由はこれを保証する」

川柳ではない。現行日本国憲法第二十三条の全文である。リズムというものは、不思議な力を持っているもので、憲法の中には、これよりも短い条文がないこともないのに、それの方が覚えにくい。立法を考える人々の中に、歌人だの柳人だのが入ると、条文全体にもっとリズムがでてくるだろうにと思うこともある。尤も明治は大政官布告に、全文が、和歌からできている船の航行規則があって火夫や船頭もよく規則を覚え、大いに評判がよかったと物の本に見える。

旧憲法から一句。「天皇ハ陸海軍ヲ統率ス」

大日本帝国憲法第十一条の全文である。公布が明治二十二年であるから、片カナ川柳は、還暦を待たずに死んだことになろう。

今テレビで活躍中の勝海舟が、始めて蘭学をやり出してから五十年で片カナ川柳が生まれ、さらに五十数年、平がな川柳が生まれた。

五月三日　憲法記念日、この二つの川柳条文だけを見ても、大政奉還から、日本陸軍、さらに長い動乱の歴史を重ねて、今日自由を欧歌するに至った百年の歳月の重さを、ひしひしと感ずる。

ところで、この学問を広辞苑で引いて見る

①　学び習うこと

②　科学や哲学の総称

論語学而篇巻頭に「学ンデ時ニ之ヲ習フ。亦楽シカラズヤ」とある。学と習とは、もともと相対立する要素であって、学は「マネぶ」つまり人の真似をすることであり、習は、羽の字がついているように、ひなどりが、羽をバタバタ動かして、飛ぶことを覚えようとする動作のことである。だから学習とは、ひなどりが親の羽ばたきを真似ながら、自分でバタバタと動かして覚えていくというのが本義になる。

同じく論語為政篇に「学ビテ思ハザレバ、スナハチクラク、思ヒテ学バサレバ、スナハチ殆シ（アヤフ）」という一節がある。この思うも習うと同義であるから「人真似ばかりしていると、進歩はないし、我流でやっていると危険である」という意味になる。成程川柳一つとって見ても、古川柳や他人様の二番せんじばかりでは、創造も進歩もなかろうし、さりとて、古人や先達を無視して、ひとりよがりに作句してこれが、川柳でございと披露されても、すぐには頂きかねることが多い。

「中庸ハ徳ナリ」と言う。よく読み、よく作り、つまり学習相半ばしてこそ、川柳としての発展が見られるのであろう。

	つき子	一七	大洲
	千代香	一八	神戸
	古庵	一九	大阪
	静馬	二〇	大阪
	柳宏子	二一	神戸
	牧人	二二	島根
	あいき	二三	寝屋川
		七、五	八尾
		七、五	大阪
		七、五	貝塚
		七、〇	岡山
		七、〇	笠岡
		七、〇	宝塚
		七、〇	大阪
		七、〇	神戸
		七、〇	大阪

昭和四十九年度第八回

「あなた（君）」五句以内

締切　七月二十日

第九回

「あと味」　五句以内

締切　八月二十日

投句先

〒593堺市堀上緑町一の三の七

藤井一二三方

大蔦川柳係

以下略

▼菜の花・富柳会合同納涼句会

とき	七月十四日（日） 午後三時富田林駅集合
ところ	金剛山　香楠荘（一泊） 翌日朝食後解散
かいひ	四、〇〇〇円
兼題	霧・夜・腰・鞭

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼直原玉青先生指導第十三回青玲社日本画展が六月十四日から十九日まで阪急百貨店七階催場で開かれた。生々庵主幹ご夫妻も出品され好評だった。

▼49年大阪文化祭川柳大会は十一月十日（日）ときまった。本社からの選者は兼題に川村好郎氏、席題は若本多久志氏。司会は西田柳宏子氏。本年は川柳塔社が当番で、川柳塔社と「川柳文学」と「天守閣」の三社が本年の川柳大会を受けもち、来年は「番傘」と「せんば」に「瓦版」の三社。（既報小松園氏のほかに薫風氏も大会打ち合わせに出席）

▼49年度兵庫県文化祭は9月23日に生田神社会館で開催される。本社から若本多久志氏（西宮市）が選者として出席される。

▼本社生々庵主幹宛に「一ヒョルアサタロウセンセイシス」リユウト。の電報。白石朝太郎氏（福島県・旧号維想楼）が六月一日夜逝去された。謹悼。

▼川柳こなゆき六月号―昭和四八年度冬眠子賞が発表された。―破れ靴行けと云われて行く砂漠―ほか四篇―細川不凍氏。

▼第26回西日本川柳大会が九月八日開催。川柳塔から大挙出席の予定―本誌参照

▼川柳の町として、またまた弓削川柳社が朝日テレビ六月十六日（放映日変更）「圭三訪問」として放映された。路郎先生が遺された「川柳の町」はその後もよき人材を得てますます隆盛、よろこびにたえない。

▼長谷川紫光氏（弓削川柳社）から―弓削平句碑が建ちました。高さ4メートル幅2メートル30センチ、日本一の川柳句碑と自慢れています。句は―睡蓮へ水もゆれてはならぬ也―

▼第十六回花童子賞は―肩書きがとれて足から老いを知る―ほか四篇（三田地草花氏）ときまる。函館市青柳町、川柳はこだて六月号

▼西原亮氏（長岡市・本誌論講で活躍）から―鞍馬先生におあいし「百人一首」の件、はりきっておられました。

▼下村梵氏（新潟市・武玉川文芸社）秋田実先生お元気になられ慶賀に存じますと。ともに小島政二郎先生とは関係の深い方である。

▼壽明忌川柳大会は8月11日午前10時から（会場次号発表―五月号）題―便箋・災難・亡き友・どんぶり・謝まる・マンション・土下座（各題三句）投句百円同封。〒862熊本市京塚本町五三―一二。七谷虹桟橋方。

▼川柳ひろしま六月号（209号）「正岡子規と川柳久良伎・剣花坊」石崎柳石―は好読み物。発行所〒724東広島市西条局私書箱15号ひろしま川柳会、定価一三〇円。

▼川柳わかまつ四九年度定例総会で主幹は伊藤茶仏氏ときまる。本社関係では理事に浅野芳朗、馬場魚山、会計に四方天弘実諸氏が留任された。

▼第二十回富士紡川柳交歓大会が七月十四日富士紡壬生川工場内クラブで開催。題―度胸・穴・口実・歩く・横着・水の音・秘訣・かげろう。七月十日締切―東予市富士紡壬生川工場内伊藤凡々宛。

▼市川鱗魚氏（岐阜県）から―処女会と呼んだ頃、赤いタスキで田植笠をかむりのどかに青苗を作っていた風景も忘れられた田舎に中途半端な百姓が出来上がりましたと。

▽同人の動向△

▼西尾栞氏から―六月をもってライオンズクラブ会長の役が解任されるのでお別れの会を伊豆長岡でもちました―伊豆の湯にやれやれやれの顔が浮き―栞。

▼若本多久志氏（西宮市）は〝けいさつの友〟（川柳漫談）に―夫より通帖の方を頼って居―路郎。―重役になり人間になりぞこね―香林。―米をとぐ娘にあらず赤い爪―多久志。などの句を入れ軽妙なタッチが好評。

▼橋高薫風氏（豊中市）経営のマンションの上棟式もすみ、すでに入居申込みがあるとのこと。好評の同氏選電波新聞社から七月大会に景品の寄贈があった。

▼小川静観堂氏（伊丹市）から―五月十一日に小川医院の上棟式、完成は七月下旬とのこと。―編集部の皆さん、また来てください。とのこと。

▼大江秋月氏（兵庫県）は現職中に応募した大鉄文芸賞第二七回の川柳の部に一等入選。英賀保駅勤務の神原白秋氏は三等入選、一駅で二名入選は珍しい。

▼竹内翁童氏（岡山県）から―自家新築―岡山県吉備郡真備町辻田字五反田一三二四―五。大の字になって我が家の木の香り―翁童。

▼山田季賛氏（高槻市）はこのほど大手術をされたが

筆まめに原稿用紙へ向っておられるのでご全快も近いのではないかとおもう。

▼小笠原有里さん（今治市・医師夫人）は人手不足でガンばっておりますと。

▼野田素身郎氏（倉敷市）七月七日の大会が参院選挙投票日となり、選挙事務の手助けとなりそうです。残念ですが断念いたします。

▼槇田英詩氏（呉市）から―六月十五、六日に盛岡の花巻温泉で開かれる全国鉄川柳大会へ竹原の山内静水さんと共に出席しますと。

▼垂井千寿子さん（和歌山市）は令息一氏の結婚もすみ、故葵水句集発刊のため一三夫氏と相談された。

▼梅窩庵不醉氏（姫路市）は日本でＩＣＳ十一番目のコンピューター計算センター株式会社が設立され初代社長に就任。同氏から編集部へ舟釣のお誘いを受けたが大会が済むまでは大阪に釘づけのため、またの日にしていただいた。深謝。

▼小出智子さん（大阪市）は勝山小学校のＰＴＡ役員として連日学校へ引っぱられ、ときには原稿も書かされるなど大多忙である。なお同校の初代ＰＴＡ会長は飛田好一氏で、同校々歌の作詞は不二田一三夫氏。

▼山川阿茶さん（大阪市）は五月三十一日夜のＮＨＫ〝この人と語ろう・藤山寛美〟の番組で、さすがに演劇通らしい発言をされ好評だった。

▼不二田一三夫氏は新関西新聞の日曜読切り小説へ〝母と妹〟と〝剣先きする〟を発表。いずれも短詩型文学が背景となっている

▼河村日満氏（鳥取市）から―中国都市監査委員会のため広島県三次市へ行き、瑤泉院の遺髪塔と大石良雄の手植の枝垂桜などを見て鳳源寺では一時間余過しました。―元禄におもいをはせる遺髪塔―日満。

▼六月二日〝天主閣〟の荒神山吟行へ高杉鬼遊、大路美幸、岩本雀蛹子、羽原静歩、浜田儀一諸氏参加。―慶応二年四月八日、神戸の長吉と桑名の安濃徳との縄張り争いの死闘を連想する丘陵の松林を散策した。

▼越智一水氏（今治市）から―永年勤続表彰で得たクーポン券と宿泊券で日光・鬼怒川・東京・熱海・箱根へ女房のために旅へ出ました―鬼怒川の湯で三十年をふり返えり―一水。（4月20日の通信記念日に奥道後で30年勤続の大臣表彰を受け夫人と式典に参列）

▼岩田美代さん（富田林市）から―ひっそりとして本当によい休日になりました―薬師寺にて。

▼村田瓢太氏（守口市）から―二年続けて皆勤をと張りきっていたのに五月は東京、六月は福井へと残念。―三月、四月には外孫、内孫誕生で大忙がし―飲んで寝てたれて孫たち日日育ち―瓢太。

▼七月七日の大会へ薫風委員長ほか役員諸氏が6月16日会場へ集合打合せをした

▼あずなろ川柳会が六月八日九日と下呂、高山の旅を楽しまれた。好郎、百酒、青香、素郎、花梢、美代、雒久子、弘生、恵美子、千万子、ゆきを、慶之助諸氏から寄せ書拝受―ようこそと飛騨高山は晴れあがり―好郎。

▼月原宵明氏（今治市）は会社の会長の随員として赤坂御苑園遊会へ。5月9日～11日。今治方面から同人を推せんしたい、と。

▼汐風川柳社（月原宵明会長）主催第二〇回愛媛川柳研究大会からの寄せ書。

▼日御碕緑之助句碑一周年の集いの寄せ書。

▼吉永川柳社（横山一声会社）湯郷温泉吟行句会の寄せ書。

▼白百合川柳会（嘉数千代香会長）の寄せ書。以上拝受。本社同人が各地で活躍されている。

▼南海川柳会は十八日午後六時から―題―自転車・ぐうだら・控え目。会場―南海電鉄本社食堂内。

▼南大阪川柳会は二十日午後六時から―題―人並・半泣き・大胆・微笑・会場―松崎町三丁目、大万。

▼川柳東大阪は二十七日午後六時から―題―自由・氷・乱れる・ブレーキ・会場―東大阪市中央公民館２Ｆ第二集会室。

▽7月の句会

食べすぎ・のみすぎに

新タケダ胃腸薬

効能＝食べすぎ、のみすぎ、胸やけ、二日酔い・悪酔いによるむかつき・はきけ・嘔吐に。

☆3層錠…27錠・60錠・150錠　☆顆粒…16包・40包

タケダ

本社　六月句会

会場　以和貴荘

七日　午後六時

今月もイスを追加する盛会。和歌山勢四氏の中に故葵水氏夫人千寿子さんも元気な顔を見せてくださる。

初出席の野呂右近氏、近藤一歩氏ほか、久しぶりの天正千梢さん、友情ご出席の西村左久良氏。にぎやかな句会にしていただいた。

若本多久志氏の柳話は、旅行マニアである氏のタヒチ旅行記である。

タヒチの人たちは日本人と同じ顔をしているそうで、人なつっこい人種だそうな。

羽田から乗ったルック（ゼット機）には十五組が一と組になっていて、その十四組が新婚組という旅スゴロクの第一の日からユーモアたっぷり。

映画「最後の楽園」で紹介されたタヒチの美しさを、多久志氏はときどきは目をつむりその世界の美観を思い出すように語られる。紺碧の空と海、島をとり巻く白い波がしらなど二十分間の耳のタヒチ旅行に満場は酔う。

六月句会の月間賞杯は那須鎮彦氏。（静馬氏選「快心」が「会心」かで静馬氏を苦しめた）―進行・西田柳宏子・記録・高杉鬼遊。

出席―与呂志・一三夫・たかし・喜風・滋雀・多久志・柳志・いわを・古方・重人・鶴声・美幸・幸生・右近・政夫・富子・百酒・文秋・太茂津・静馬・千万子・一歩・眉水・儀一・葛城・悦郎・一舟・勝晴・正彰・十止庵・花梢・千梢・好一・吸江・肖二・綾女・三十四・生々庵・誓二・緑水・牧人・維久子・夕花・鎮彦・米子・素郎・一二三・君子・智子・静香・柳宏子・雀踊子・左久良・凡九郎・千寿子・酔々・鬼遊・南柳・柳信・あいき・柳太・岳人・小松園・好郎・庸佑・史好・薫風・栞・新之助・葉子。

席題「陳　列」　島居　百酒選

陳列へ並べる値札つけ変える　柳　志
陳列のガラス割れそう女の目　与呂志
陳列の品はずさせた満足感　綾　女
陳列に女の虚栄がならべられ　雀踊子
モニターとして陳列も見逃さず　古　方
陳列に入れたら一けた上に見えあいき
銀座八丁陳列だけを見て通り　鬼　遊
陳列で奥の商品たかが知れ　政　夫
ショウインドウ海をバックの夏を売る　滋　雀
陳列の買えぬ値打を通り過ぎ　柳　志
国宝にはガードマン付いてる美術展　誓　二
保健所に陳列の蠅見つけられ　右　近
陳列もない軒店へ人が寄り　葛　城
陳列に店主の趣味も添えている　政　夫
客種を見て陳列を換えるこつ　維久子
陳列へ又足がむく好きな柄　千万子
あきらめがつかず陳列又のぞき　維久子
陳列に並べた柄から売れていき　十止庵
娘の作の陳列されたを電話する　千寿子
陳列のテキの厚さを見ては入り　肖　二
贈られた値踏みを陳列へ覗き　太茂津
陳列に入れたら捌けた売れ残り　静　馬
陳列のマネキン程に着こなせず　葛　城
陳列もせずに結構売る老舗　左久良
着る人が着ればと陳列うそぶいた　凡九郎
陳列にあった折にはよう光り　柳　信
重文はにぶい光りのガラス越し　滋　雀
陳列のガラスへみじめさを映し　一三夫
陳列を模様替して雨続く　政　夫
陳列の中の草月流が枯れ　小松園
陳列の中の目玉が売れ残り　百　酒

席題「二　流」　野村太茂津選

二流には二流としての芸の巾　綾　女
二流には二流で生きる道がある　牧　人
二流には二流の良さをドサ回り　左久良
いいとこで赤子が泣いた二流館　鬼　遊
お座敷がもの足らないと二流客　いわを
二流でもプロ壺を心得る　古　方
旅なれて二流旅館の上得意　柳　信
二流でも結構女将の瞳がきれい　生々庵
二流品に見せぬ女にあるセンス　君子
敗戦の涙二流に明日がある　美　幸
秀才をあわれとも見る二流の目　幸　生
親も子も二流のんびり生きている　十止庵
二流の宿素朴な味でもてなされ　静　香
儲けでは二流の方にひけを取り　文　秋
我が暮し二流の店が性に合い　鶴　声
此の人は二流らしいと知る庖丁　右　近
プライドが敬遠してる二流品　夕　花
二流でも良し大衆の口に合い　あいき
せめてものプライド二流もよしとする　凡九郎
二流というひけ目で崩れまい努力　生々庵
ひかえ目な当主二流に甘んじる　一　歩
二流品ですと言う正直を買うてくれ　柳　志
二流どこでチップをはずむ旅の通　右　近
二流でも島のホテルに味がある　酔　々

ワテらには二流も肌が合いかねる　凡九郎
川向う二流の宿が楽しそう　多久志
汚職して二流のバーで派手に酔い　勝晴
一流にはなれず二流にもなれず　あいき
子に無理は言うまい俺も二流人　右近
一流に負けぬ気概を持つ二流綾女　外観は二流ちゃっかり儲けとり　いわを
一流と自負へ世間の目は二流百酒　二流でもともかく入学した祝い　素一郎
一流の味より二流口に合い　儀一
二流店気楽に客の顔で入り　政夫
どっち道二流でいいさ子沢山　与呂志
サービスを二流に落とし値上げする　滋雀
二流には二流としてのプロの味　好一
サービスが一流という二流宿　多久志
物まねが上手二流を抜け出せず　文秋
頭張って見たが二流でたそがれる　正彰
二流にもなれぬプライド持てあまし　柳信
商魂は二流店主の低い腰　富江
侮った二流の意地に突き当り　牧人
一生を二流で徹す自負を持ち　太茂津

席題「水　枕」　西　いわを選

飲み過ぎて水枕にするハネムーン　一舟
水枕音が気になり寝付かれず　たかし
熱出した子供の甘え水枕　鎮彦
旅先でぬくい涙の水枕　柳信
水枕かえる視線の外は雨　雀踊子
粉を振って隣へ返えす水枕　葛城
水枕チューブ貼っても洩れやまず　静馬
水枕ちいさくわれる子守唄　生々庵
要るときにいつも騒がす水枕　吸江
水枕ずらしてかるい子の寝息　夕花
長患いへ同情しない水枕　勝晴
深酒はもうせぬ水枕がぬるい　十止庵
水枕はねて明日へ快し　太茂津
肝腎なときみつからぬ水枕　肖二
水枕母の冷めたい手も触れる　夕花
水枕この看護婦の話し好き　柳志
水枕母の布団の低い嵩　政夫
健康が宝と気付く水枕　牧人
今晩がヤマと覚った水枕　眉水
水枕更えて付き添い編みつづけ　柳志
無名作家遺稿となった水枕　一三夫
水枕オデコに妻の手がふれる　雀踊子
出稼ぎの微熱へ友の水枕　雀踊子
真夜中の不安知ってた水枕　与呂志
水枕替える音にも気を遣い　柳宏子
水枕今朝からとれた子の寝顔　生々庵
水枕コケシ心配して見てる　岳人
張りのある声が出て来た水枕　維久子
水枕仕替える母へ夜が白み　牧人
棚の上でホコリだらけの水枕　肖二
倖せは忘れられてる水枕　重人
虹が出ているので干そう水枕　酔々
熱の子に十字架見える水枕　生々庵
水枕夢を見ている虹の橋　いわを

兼題「合いの手」　阿部　柳太選

合いの手に小言の父は猪口をなめ　どんたく
ちぐはぐに打つ合いの手に嘘がばれ　幸太郎
合いの手をうった心がうずき出し　翁童
口べたも合いの手だけは忘れない　藤持
合いの手の木魚がひびく昼の寺　登美也
合いの手は赤い蹴出しの阿波踊　酔々
合いの手へずっしり重い地曳唄　鬼遊
合いの手にお国自慢をひきたたせ　喜風
合いの手がお腑まいで踊り出し　静香
合いの手は南無阿弥陀仏法話聞く　美幸
合いの手にのせられ社長はお人好し　与呂志
合いの手がお師匠はんでかたくなり　文秋
合いの手の三味も年期の音で冴え　静香
合いの手を入れて女も酔心地　花梢
合いの手が愛のムードをぶちこわし　小松園
合いの手を使いわけする妻の知恵　維久子
合いの手に孫がぐずって話切れ　綾女
合いの手に人形の舞が生きてくる　緑水
合いの手は口三味線で酔うてはる　柳志
頓狂な声で合いの手打つ音痴　富江
酔った振りしても合いの手聞き分ける　柳信
合いの手をずるいと思う眼に出会い　千万子
合いの手に後の台詞を見失い　鬼遊
合いの手のこつを覚えてみとめられ　維久子
万引をする合いの手を見やぶられ　千万子
異議なしの合いの手いれるだけの役　吸江
良心に問えと合いの手が入り　滋雀
出しゃ張りの合いの手話をもつれさせ　牧人
合いの手を打って打たせてグルだった　一三夫
合いの手へ煙草の煙吐く自信　政夫
合いの手のタイミングよくすすり泣く　花梢
秘書という立場合いの手抜かりなし　十止庵
ワンマンも合いの手がいる気の弱さ　千万子
合いの手に作意を秘めて聞き上手　与呂志
上げ足を取る合いの手で腰を折り　文秋
合いの手を入れた仲居におだてられ　儀一
合いの手が調子はずれで唄も出ず　あいき
合いの手の美人の方へ気をとられ　好一
盃が足らんと合いの手へそをまげ　千楠
鮹の功もう合いの手を意識せず　古方
合いの手に金切声を出すサクラ　静馬
合いの手へ偽装のタクト振る女　悦郎
合いの手を約束どおり打ってこず　一三夫

合いの手は母だけとなる父の唄　美幸
合いの手にうっかり本音吐きかける　幸生
責任のない合いの手も他人なり　維久子
合いの手をうっかり入れておごらされ　柳太

兼題「波止場」　　小浜　牧人選

望郷の汽笛波止場に聞きにくる　翁童
埋め立ててだんだん沖へ出る波止場　幸太郎
釣竿がひしめく波止場は五月晴れ　軒太楼
夢失せた鷗が低くとぶ波止場　亜鈍
紙くずがキリキリ舞っている波止場　勝晴
騙まされそうな女が波止場に行っている　悦郎
書き割りのような波止場へ月が浮き　一三夫
求愛の言葉を波止場でまだ迷い　キミ
今日帰る今日も波止場に佇ちつくし　太茂津
波止場の灯見えてマドロスひげを剃り　静香
メロドラマ波止場の雨は斜にふり　維久子
もう二度と会わぬつもりへ銅羅が鳴る　小松園
出漁日幼児もテープ持つ波止場　静馬
開発の波に旅情のない波止場　滋雀
ノラ犬がたむろす波止場黄昏れて　勝晴
ドラマめく女波止場にあらわれる　悦郎
波止場まで来たが家出の気がゆるみ　鶴声
ドラマが生れドラマが消えて波止場の灯　君子
波止場から山の男が出て行った　岳人
コトリとも音なし波止場の昼下り　肖二
混血の父につながりもつ波止場　雀踊子
マドロスがロマンを捨てて行く波止場　緑水
船還る妻若やいで待つ波止場　眉水
ランデブー波止場の蟹がのぞいてた　柳太
義理できた波止場テープがすぐに切れ　十止庵

一分間の柳論

古川　鶴声

現在の柳界は往時の俳界の軌を踏んで居る傾向に見える。柳界は昔から先生と呼ぶ人、呼ばれる人なく、趣味に通じた人等が俳界から脱皮し、車坐になって俳句と同じ十七文字を持って、俳句に詠めなかった人間生活、政治家に対する不満を詠んだのが始まりで現在に至っても江戸文化の研究資料として重要視されているのが川柳である。俳句には先生がありそれに習えで米の飯を頭に喰った連中が名を売らんがために新興俳句と云う川柳と俳句の合いの子、人間を詠むようになって来た。川柳界にも御同様の御人が現われ本格川柳の三原則からはなれ、作句時代を反映するような句が姿を消している傾向にある。川柳は如何に時勢が変ろうとも川柳は変らず三原則に依って時勢に合わせて詠めばよいのである。現代はデパートで葬式取扱いを行う時世である。また大臣が副業にお茶屋を平気で営み本職を忘れる時世だ。川柳人よ目を大きく開けて世上の穴を突きとめたいものである。

兼題「快　心」　　傍島　静馬選

快心の笑み合格の胸を張る　祥月
夕凪ぎの波止場を入り陽赤く染め　肖二
母さんと別れた波止場霞んでた　千梢
大漁の旗へ波止場が湧き返えり　葛城
ワンダフル波止場に碧い眼のお世辞　滋雀
思い出をそっと温めている波止場　智子
青春はいいね波止場にある別れ　夕花
波止場にも明暗がありテープ舞う　いわを
お母さんあれが波止場だ街の灯だ　好一
波止場の灯へドロの海も美しい　政夫
新風景コンテナー埠頭も街となり　たかし
ヒロインになれず波止場で石を投げ　幸生
青い眼の涙も波止場知って居り　一舟
波止場にはなぜか哀しい音ばかり　一三夫
大漁の波止場に朝が弾み出し　滋雀
午后の波止場に気笛気だるい音を引く　牧人
頂上であぁ快心の深呼吸　季賛
快心の陶器こころがこもってる　亜鈍
快心の声がかすれるインタビュー　登美也
子別れの気持ちだ快心作が売れ　どんたく
快心の案次ぎ次ぎに否決され　水車
快心にことが運んだ酒の味　軒太楼
快心の一撃四者生還し　右近
書きつぶすばかり快心の字とならず　綾女
恋成就快心の笑みかくしかね　あいき
快心の作が浮んだ夢枕　肖二
快心の笑み式場に入る二人　喜風
快心の作へ他人の目がきびし　綾女
ライバルを抜き快心の軽い足　富江
快心の出来とは本人思ってず　肖二
快心の勝利へ旗がひるがえり　牧人
快心はまず健康を意識する　たかし
自画自賛快心作へ悦に入り　好一
快よい響き耳許こそばゆい　小松園

快心の汗頂上の山男　富江
社屋竣工快心の祝辞読む　多久志
快心の笑み出藍の弟子ができ　素郎
快心のドラマ意外な低視率　左久良
裁判に勝って快心のかおでなし　柳志
快心の笑をたたえた時の人　柳宏子
快心の作も活字にならず消え　右近
会心の演技へまんまと借りられる　一三夫
快心の笑みをもらした悪だくみ　文秋
快心の作で売るのが惜しくなり　百酒
大物を釣り快心の魚拓とる　眉水
快心の両目のダルマと写される　静香
快心の業が決まった土俵際　好一
快心の見せ場で客にあくびされ　一舟
快心の髪形夫はしらん顔　あいき
快心の当りが窓を突きやぶり　静馬

兼題「雨だれ」　**橋高　薫風選**

雨だれがポツンドラマの幕が明き　左久良
陽が射してきて雨だれのひとしずく　素郎
雨だれが音立て出して夜が明ける　古方
雨だれの音に朝刊引きよせる　宗義
雨だれも溜めてお寺の防火水　喜風
雨だれ雨だれあの日あの日の雨だれ　凡九郎
雨だれのリズムに恋の日記書く　政夫
雨だれのとこだけ空いていた座席　柳太
デートする日の雨だれはリズムもつ　柳宏子
雨だれが胸の炎を消せという　千万子
雨だれの軒端につばめ二羽三羽　好一
雨だれに和解のこころ熟れてくる　新之助
雨だれのリズムへおじぎする　嫩葉
雨だれに通う言葉を一つもつ　智子
雨だれの詩三畳の間借りとて　十止庵
雨だれへあほらしなって来た詩人　柳志
雨だれに失意の酒も酔いきれず　政夫
その先を考えろと雨だれ止まず　新之助
雨だれにこの頃あたる気象庁　花梢
南から帰り雨だれ母と聞く　美幸
雨だれに少女の祈りがつづいてる　亜鈍
雨だれに蟻の館が崩される　登美也
雨だれがぽとりとやさしい父の音　維久子
雨だれの一念男の貌作る　君子
雨だれをくぐる庵主の白い足　雀踊子
雨だれに濡れ蜘蛛の巣の蜘蛛孤独　与呂志
雨だれにマンママンマと手を出す児　静馬
雨だれが落ちる樹間にちぎれ雲　岳人
雨だれがいつしか溜まる胸の奥　夕花
雨だれが地蔵の肩を軽く打ち　左久良
日曜の雨だれ悪心湧いてくる　翁童
雨だれの音でとんでもない夢を見る　季賛
雨だれへ神経質な造成地　小松園
心臓へ釘打つ音で雨垂れる　柳宏子
雨だれのリズムお経に似て来だし　一舟
雨だれを聴いて気負いのない日なり　いわを
雨だれの線幻を真っ二つ　太茂津
雨だれの音へニヒルのパンかじる　勝晴
雨だれが母のない子によく響く　夕花
雨だれは聖母マリヤの瞳に溢れ　酔々
雨だれに無言でわらを打った母　鎮彦
脳天に雨だれが落ち株を売り　薫風

（整理・河井庸佑）

雅号ぶっちゃけばなし

しょうめい

(128)

つきはら

月宵原明

工務店役員（元地方銀行部長）
明治四十三年生れ

大正の終りニキビ華やかな頃、小説や創作を耽読して文学青年を気取り、ものの哀れを知り叙情的な宵明りの雰囲気にときめき、宵祭りの神燈の灯りがなんとなく好きでした。

当時神経衰弱（トランプに非ず）今のノイローゼを解消するには川柳のユーモアだ、と思い渡辺暁童兄の宅を訪れ十九才で川柳入門以来前田伍健師、酒井大楼師に薫陶をうけ、路郎先生にも大変御世話になりました。

以上の理由と、本名勝明を「しょうめい」と音訓して「宵明」としたものです。

本名も号も月が三つ、日が二つ、伍健先生も語調もよく姓との調和がとれ、日月と共にあり大いにやって下さいと言われたものですが

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

どんぐり川柳会　谷垣　史好報

早合点　女が不意にだまり込み　悦郎
種蒔いて子供と触れあう時を持ち　凡子
手ごたえのなかった妓がたずねて来　万里
噂まだ火種のままで燃えている　弥生
ついている男手ごたえなど言わぬ　美幸
まだ七十恋の火種は絶やすまい　好郎
手ごたえは無い筈結婚通知来る　小松園
手ごたえあったか煙草にむせている　吸江
手ごたえを師匠は特に喜こばれ　喜風
一と月でこんなに手ごたえ違う孫　奈々
手ごたえにバラバラとなる積木かな　いわを
手ごたえのなさは過保護の過去を持ち　修史
手ごたえのない釘横から顔を出し　鬼遊
求人ビラ手ごたえもなく褪せたまま　比呂路
柿の種　猿に覚えのない童話　儀一
早合点されて話はそれてゆき　克美
早合点うぶ湯わかして夜が明ける　岳人
一生の不作写真の早合点　一歩
手ごたえのある一日だった大ジョッキ　史好

川柳ささやま　河原みのる報

女の子が泣いて卒業式らしく　可住
無事卒業心のどこかに穴があき　豊子
恵まれず金の卵として巣立ち　とおる
寡婦の眼に答辞よむ子が父に似る　百合子
卒業できれいなままの恋一つ　喜美代
夫婦でも互の心のぞく日も　とんぼ
気押されたミクロと取組むうしろ肩　みのる
ただ覗くつもりへ自動ドアがあき　初音
うっかりと覗けば更衣室だった　無鬼
袖口へ色気のぞかせ若う住み　八陣
加速度にこれから変る世が見たし　松堂
諸役解放これから平でいく安易　近江
金ですむこっちゃとピンチあしらわれ　ひか平
値上りのピンチ続きに屋根が漏り　枝葉
無免許が先車の事故でピンチ抜け　秀峰
これからというとき事故で散り急ぎ　よしの
追い詰めた方がピンチで荒い息　越山

川柳たましま　稲田　豊作報

堂々と詫びる立派な敵である　梁水
珍客を値踏みしている台所　扇水
頂上の眺めは知らぬ蟻である　三辛堂
善人が作ったこわれそうな罠　慶子
悔いているらしい夫の背が丸い　千翁
渇いている街で造花を作ってる　澄子
台所女の知恵を研ぐところ　八笑人
歩いてるまだ歩いてる悔いている　林鶴
ひたむきに娘でもでもでもと言う　三林坊
台所のぞき食欲叱られる　流風
母と子の接吻乳の香にむせる　柳二
火ともえて蝶の口づけ待つカンナ　朝二
悔少しうすらぐ色の花を活け　皷草
立派と誉めても所詮貸衣裳　博子
長マラソン根気で勝負の差をつける　武子
ままごとの口づけ犬が見つめてる　静海
汗で来た方角だから子が嫌う　豊作
接吻もせずに別れて忠魂碑　安静
沈黙が続き刻々迫る危機　麗水
手作りの味ゆずり合う嫁と姑　承平

堺・若芽川柳合同句会　八木摩天郎報

今の世は残りものとて福はなし　藤持
一年生残さずたべてほめられる　清女
あまり飲めませんのが最後まで残り　静馬
春の窓月の光りを褒めて病み　季賛
月光を避けた二人の愛の影　柳影
光りのある間倖せだったマッチ売り　誓二
テストされてるからうっかり話せない　徳子
予備テスト進学園の外に居る　笑痴
ブレーキテスト生命預る下り坂　たつお
ハプニング女はまるい叫び声　天笑
春は花屋を出てから叫びたいこころ　作二郎
悪友も居らず休日もてあまし　柳信
方言で昔にかえるクラス会　絢子
病む友へ心はげます手紙書く　肖二
友と行く山の高さ苦にならず　綾女
繩のれん息子のような友が出来　春翠
自分だけの友と思うも女なる　宏子
のめるだけ飲ませて夜の肩をかし　春巳
悪友と知らず新妻手をつかえ　摩天郎
儲けてる友達の肩叩いとき　小松園

川柳たけはら　森井　菁居報

妻かえる娘と嫁で花も活け　静水
どんな風吹いても嫁は有難し　房子
母さんが入院をして知る家計　静雨
入信をすすめ参院選にふれ　凡女
映画のストーリーはどうでもよい二人　蘭幸
笑う日よいつかは海の広さなり　政巳
旧道を避けて旅人きどりかな　不朽
主義持って来る清貧に耐えている　菁居
血筋あらそえぬ一才ビール飲む　そのみ
ぴかぴかの名ふだがいいな二年生　愛
春そこに足ふみしてる今朝の冷え　かつ子
気まぐれに爪染めるのも春かしら　貞子
聞き分けて行く幼子の瞳がいとし　紫光

片思い今日もきめてのない日記　のばら
追いついて叩きつけたい金がなし　英詩
ちびて行く靴よ明日の夢を追う　鬼焼
嘘の涙か乾くのが早い　一路
今少し生きねばならぬ虫歯抜く　酉合
よいことの予感がしきり福寿草　文明
筋金は大阪弁で叩き込み　扇水

高知川柳社　川竹　松風報

入学日校長ひげを整える　マコ
入学へ予算が狂う物価高　紅雨
入学へ付添うママの派手好み　一巻
発表は裏口入学区別せず　一二三
何となく突刺すようなご挨拶　百日紅
針刺しの色糸揃う手内職　窓花
刺すような言葉美人の口から出　運幸
人間とはこんなものさと云う悟り　美知
野良犬の鼻が破ったポリ袋　三吉
家中を春の匂いに蕗ゆがく　温夫
春である倖せ素足にある若さ　寛
相乗りの若さ明日は考えず　たけし
服脱けばピエロ意外に若い顔　白影
若いとはいい失敗を恐がらず　梨生
式挙げぬ二人に悔のない若さ　裕二
来客に塵の一つが気にかかり　八重
失保だけで食えてゆく猫背　星雨
立札の広い野原で遊べない　恭一
立志伝海の広さを見て育ち　桂緑

ハワイ川柳ウイロー社　林蒼蛇楼報

仲裁の手段ちょっぴり嘘もまぜ　風影
こっそりとあの手この手で儲けてる　河舟
やる事に決めて手段で又もめる　椰子郎
戦略の禁油へ世界が揺れうごき　万里歩
挽回の手段になやむ気のあせり　エス子
あくどさは手段選ばぬ金もうけ　北海
だんどりが上手で会を盛り立てる　暁舟

裏のうらまだその裏に在る手段　三石
いろいろと手段練ったにこの始末　公女
金のため手段選ばぬ時代相　十吉
義理ゆえにあの手この手でせめられる　雪女
手段尽き歯をくいしばって泣きを入れ　カロ女
禁煙のきめ手は結局強い意志　蒼蛇楼
この急場ぬけるに居留守の他はなし　草海
金をとる手段女は泣いて見せ　水泡
断末魔最後の手段は神仏　拝山
此の不況倒産のほか手段なし　小雪
直情径行押しの一手で生きる途　峯円
頑固者手段選ばず我を通す　稠雄
成功に手段選らばぬ向う見ず　快夢起

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

嫁ぐ夜の思いをはせて眠られぬ　前田
おんぼろのアパートに馴れて気にしない　中野
高層が朝帰りの足重い　上田
アパートの鍵を二つの共稼ぎ　常夢
アパートの窓に寄り添う影ぼうし　栄
ブレーキのせいにしてすむ事故現場　常夢
ブレーキが要らない部下で物足らず　千夢
ブレーキがかからないまま二日酔い　有一
私にブレーキ役の居ぬ不幸　博泉
アクセルとブレーキ社長間違わず　一扇
爆発魔左で書いた脅迫状　文川
ひじ鉄も左利きとは知らなんだ　栄亜
箸を持たせて分った左利き　成酒
盃を持ちなおしている左利き　井
パチンコがぜんぜん勝てぬ左利き　鮫聖
手拭いに石鹸つける左利き　地
右手でも人並みできる左利き　形水
アパートでしのび逢う日の眼の出逢い　弥生
箸と字は右で書いても左利き　入仙
道遠し今日のブレーキたしかめる　好郎

川柳大阪　児島与呂志報

足もとにラジオを置いての納屋掃除　徳松
歳末の特売人が舞い札が舞い　閑士
特売へ集る主婦は雑魚に似る　喜酔
一雨が染めた緑に光さす　呑歩利
溺愛がうらなり胡瓜の子に育て　徹舟
逆境に知人がそっと知恵をかし　敏
後遺症残してストの批判受け　秀峰
失業者いてるんやろか戎橋　重人
足代を足せば特売とも云えず　楽々
あかんやろかと女の首細し　胡蝶
スペースがある末筆へ一句入れ　本蔭棒
スペースを埋める原稿とも知らず　笑風
スペースに合せて孫の初節句　漁人
行楽の春へ居座わる低気圧　雅巣
気がかりな言葉残して電話切れ　誓二
もう一度恋もして見たい修善寺　武松
獄窓に愛うえたままつながれる　洛酔

佳句地10選（前月号から）

竹中肖二選

祝い酒持って来ただけ飲んで去に　一栄
腹の子が三々九度を笑ってる　一声
不仲とも知らず蔓ばら垣根越す　綾女
立膝で繰る花札に敗けている　鬼遊
出世する度に故郷が遠くなり　飛鳥
モニターも自分のものは別に買い　小松園
差し向いと云う条件へ嫁くと決め　六竜子
春の土雑草の芽も抱いてやり　好郎
芸なしはただ忙しく箸うごき　カロ女
憧れを抱いて女は貝となる　智子

愛と云う字もありました日記帳　道子
ちっぽけな愛が露地裏からこぼれ　与呂志

駒つなぎ川柳会（大阪市）岸　南柳報

だまされて笑ってすます四月バカ　正美
里の父二言目には馬鹿野郎　南柳
療養所暇と闘い生きつづく　規一郎
釣好きはよっぽどひまか根がよし　眉水
忙中に閑あり趣味に生きている　肖二
ひまな日にかわりのない読書好き　柳信
メーデーの列を乱したにわか雨　綾女
怒りぶちまけてるメーデーのプラカード　誓二
メーデーの列切り離す信号機　育園
肩車メーデーの列と共に行く　悟郎
メーデーに子連れ妻連れ楽しそう　鎮彦
メーデーのあとはごみ箱泣いている　信義
メーデーのはりぼて首相の顔ゆがむ　はやを
メーデーが職場の恋をみのらせる　宏子
メーデーの流れが消えた縄のれん　儀一
メーデーの流れ解散恋となり　小松園

南海電鉄川柳会（大阪市）辻　圭水報

老人の伸び率父母も仲間入り　清女
伸び率はよくて現金ない会社　柳信
出産の伸び率日本急に落ち　綾女
伸び率をクラブに書いてたたく尻　肖二
伸び率をまあまですよとぼろ儲け　儀一
伸び率のアップダウンに身が細り　幹木
住宅の伸び率電車儲けさせ　季賛
伸び率を不当所得とにらまれる　宏子

和歌山七面句会　三幸報

豆腐屋の手に豆腐は素直なり　ふく代
赤ちゃんが入って居そうな紙バッグ　和美
水だきの豆腐へ仲居軽い箸　政夫
気兼ねせぬ街を活歩の紙バッグ　勇次
鍋物にとうふかかせぬ立役者　富子
里帰りして白あえを覚えて来　ふく代

きびしさのただよう部屋に寡婦一人　マサ子
荒れそうな部屋へ一輪活けておく　太茂津
奴豆腐四角四面の軟らかさ　光治
醤油を二、三度注ぎたす冷奴　しずえ
レシートが底に溜った紙バッグ　次郎
紙バッグ中からおむつ出してくる　三幸

川柳しんぐう　大矢十郎報

寝台車異性ばかりで寝つかれず　まさ子
逢うた夜の秘密をマッチ喋り出す　牧人
一本のマッチ倖せ焼きつくす　としよ
婆さんはマッチでないとラチあかず　栄
一本のマッチ思わぬドラマかく　武雄
マッチ箱みたいだけれど僕の家　入道
声だけを聞けば悪人には見えず　富子
物売りの声に居留守を使ってみ　さだ代
たしなめる声が母になっている女　与呂志
ちょっと声かけて一生つれそう気　とよ子
声なき子紙一ぱいに筆運ぶ　操
お悔みの声消えかかり消えかかり　十郎
大声で叱って憎いわけでなし　大輪
ふらふらと夫の幕前へ歩の向く日　里美
ふらふらと蚊になるまでの浮き沈み　幽仙
探しものでふらふらになり妻の留守　喜一
夜桜に夜ふけと知らずふらふらと　つる枝
ふらふらにさせてポルノはご勝手に　豊水

城北明朗句会　川口弘生報

春を待つ心は寒さ寄せつけず　春巣
ハンカチのたまって友がへって行き　柳信
這うてくる孫へあたふた片づける　静歩
入歯してもとの笑いを取り戻し　鉄児
ハッタリも男の芸と智恵をつけ　弘生
裸で出す娘にささやかな荷拵らえ　誓二
原稿紙のわくをはみ出すうれしい日　ますゑ
風雪に耐えたおかげで春日和　茶々坊
鼻声のクシャミに玉子酒がくる　三十四

ハンサムと云われた顔ももうおとし　繁子
春一番新幹線もべたおくれ　濁水
配達料込みで値上げがごまかされ　百酒
私も好きで好かれた人もあり　秀村
目をまわす世相の風にまけまいぞ　駒子
酒たばこやめて他人の馬にかけ　生仏
係踊る私の縫った絆着て　つね
おもちゃ屋へ近道係が知っている　満津子

川柳わかやま　野村太茂津報

捨て犬も花見のゴザの端をかけ　裕美
ひとかどの詩人となった花吹雪　里美
その女弱味を何故か見せつける　凡九郎
乾杯の涙カメラは見逃がさず　マサ子
燦然と光る指輪にかくす嘘　としよ
矢車の音と光と童心と　静歩
おみやげは父母に命を持ち帰り　ふみよ
錆びついた単車へ話し子を偲び　入道
呉服展わたしも女歩を止める　三千代
流し台つまり女の耐える日よ　十郎
押花も添えて二人の愛育つ　白光子
目の光苦節が読める皺の奥　寿々子
古傷にふれないようにして夫婦　千寿子
つつましく嫁姑つきと言う弱味　芳童
幸せの花は皇居の庭で咲き　福水
金貸した方が弱味となる因果　吉野
通訳が要るのに孫がよく喋り　文秋
隙みせぬ女であまり喋らない　小松園
ひとごみにもまれ帰って角が出来　武雄
そよ風も添えて花ビラ舞い納め　太茂津

京都「塔の会」　松川杜的報

菜の花のなかへ遍路の鈴が消え　水客
まわり道して行きついた人間味　王石
目が回る程の多忙もあってよし　和友
倖せは回転木馬の二人乗　明代
病床の廊下の話に気が回り　求芽

ひと回りして似合うかとニューモード　えいこ
蔵出しの新酒を升で順に飲み　誠史
過去の史を繰って行列街回る　笛珠
飛行塔ぐるぐる春の日を回り　飛鳥
回り道してよかったと思う事故　三求
独楽が回ってる楽しくなってくる　杜的

丸文川柳会（倉敷市）　竹内　翁童報

春財布小銭が鳴ってる物価高　芳仙
野良犬も恋を求める春が来る　礼子
春近しもぐら出番の爪をとぐ　成徳
入園を子よりも親が嬉しがり　八州
雪どけを待ちかねて咲く梅の花　旭竜
公害の空かもわからぬ春がすみ　勤勉
十回目の春へいまだに平社員　万美
春まだきシャシャリ出ました新入生　一甫
春の雨寄り添っているぬれている　頑念
花見酒飲ませ上手にのみ上手　豊弘
春一番二十の胸のときめきか　智恵子
ふまれてもふまれても麦春へ伸び　一郎
襟足が春を呼んでる京舞子　春日
花だよりもう気乗りせぬ歳となり　黙生
雪の谷間に春が来た水の音　順子
咲こうかな咲くまいかなと梅の花　玉仙
春秋に富むから強く叱かりつけ　翁童
春斗の線路の上を蝶が舞い　凡太
朧月またも片恋に終りそう　素身郎

南大阪川柳会　金井　文秋報

怠けたら今日が食えないドヤを出る　滋雀
怠慢が三人寄れば遊ぶ知恵　喜風
コンベアの世は天分に枷はめる　正彰
天分に満足できぬ母の鞭　十止庵
天分が途中で曲った方へ伸び　水京
天分をよってたかっていびつにし　柳宏子
天分があるとおだててこき使い　静馬
天分を放っとかれてる施設の子　静香

倖せは天分生かす職を持ち　文
合格と出た占いにささえられ　智子
占いの奥へ奥へと値が上がり　静歩
酒で果てると占いにおどかされ　一栄
どん底に落ちて易者の門叩く　牧人
相性は凶で金婚式迎え　弘生
大言を吐いた男の底が知れ　好一
大元帥そんな陛下の遠い夢　誓二
狭くても大の字に寝る城を持ち　あいき
つつ込みで仕入れ大中小で売り　形水
人形となる心沈む日の晴れ着　君子
スナックの夢は目抜きで喫茶店　好郎

吉永川柳社（岡山県）　平井三与子報

十年目やっぱり亡姑の真似をして　一柳
十年を目標のない道ばかり　草人
十年も耐えて看板箔がつき　春景
十年のキャリア機械化に押され　芳月
十年の体験我慢の味を知り　三与子
十年のキャリアが的を外さない　宗義
あと十年残りの花をどう咲かす　武夫
しげしげと十年振りの手を握り　久来雄
本当の馬鹿には出来ぬ馬鹿の役　一声
太陽と海に思い出の歌がある　恵美子
あきらめているのに思い出追いかける　万女
わが町へ短詩十年の金字塔　大成
十年のしわへはっきりつく自信　浄美
英雄の思い出ジャングルの中にあり　白黒
思い出のアルバムめくる老夫婦　たくを
二十円の切手に思いありったけ　飴ン坊
病院の思い出ばかりある不運　秋月
思い出となって話せばただの人　梨香
思い出はまだ生きている母の愛　伊久野
思い出を女一人が抱いて生き　胡風
初恋の思い出針の手をとめる　柳子
思い出は悲しい白いカーネーション　正洲

川柳東大阪　竹中　肖二報

産み終えたやすらぎ顔に妻ねむる　綾女
晩酌でやすらぐ父は小市民　誓二
妻がいて子がいて茶の間やすらげり　君子
やすらぎへ女は妥協してしまう　凡九郎
旅装解き一服すれば眠うなり　柳信
かりそめのやすらぎ男の口車　重人
やすらぎが続き不安になって来る　文秋
娘の晴着母の心は満ち足りる　肖二
ゆきずりの晴着同士がふりかえり　百酒
晴着きていつか言葉もあらたまり　十止庵
晴着ねだるチャンス夫の上機嫌　あいき
歓待は自らシェーカー振ってくれ　柳宏子
カクテルへ女の嘘がとけてゆく　雀踊子
カクテルのグラスが重い日の別れ　好一
カクテルに酔うたふりして抱かれる気　鶴声
カクテルを透けて電光狂気染み　弘生
カクテルにロマン見たのも遠い夢　太茂津
強そうなカクテルをとる婿の父　古方
三方の上で伊勢海老はねている　思月
三宝に帰依煩悩がまだ去らぬ　喜風
三方に五穀供えて初神楽　三十四
結納の重み三方しかと受け　一栄
歯を入れて髪を染めたくなっている　智子

川柳句集『汐風』　価　千二百円　送　一四〇円

―汐風川柳社創立二五周年、三百号記念として刊行。B6版・P620、参加全国川柳人三〇九名。発行所―今治市桜井東天神町、月原宵明方。振替口座広島二八九七〇番。

横書のページ

★雑詠の玉句の上部へ1から10まで入れたり、一、なになにとうどん屋さんの舌代のような書き方はおやめください。すべて本誌印刷ままの書き方にご協力ねがいます。編集部ではいちいちそれらを消して印刷所へまわしています。

★川柳塔社常任理事会（5月4日）出席者は多久志・柳志・古方・生々庵・いわを・形水・万的・薫風・一三夫諸氏（6月4日）出席者は柳志・多久志・古方・生々庵・いわを・薫風・文秋・小松園・形水・栞・一三夫諸氏～議題は句集と大会にしぼられ、川柳大会は薫風大会委員長のもと、幹事諸氏が一糸乱れぬ協和で着々準備完了へ進められている。

★10月6日の同人総会および二賞発表句会の会場は川柳大会と同じ会場ときまる。

★路郎句碑建立25周年記念第26回西日本川柳大会は9月8日（日）特別課題「雲」は麻生葭乃先生の選になる。川柳塔社から生々庵主幹をはじめ大挙出席、ふるって皆様もご出席ください。

★8月本社句会の兼題は「惰性」「余技」「寺」「動く」

・募集・

九月号発表（7月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選
水煙抄（10句）川村好郎選
課題吟（各題5句以内）
「地震」木村弥栄子選
「雷」蔵本白梅子選
「火事」月原宵明選

十月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選
水煙抄（10句）川村好郎選
課題吟（各題5句以内）
「選手」野田素身郎選
「立ち読み」渡辺暁童選
「菊」吉田水車選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。

★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

7月7日は句集刊行と川柳大会

定価 二百五十円（送料十六円）
半年分 千五百五十円（送料共）
一年分 三千円（送料共）
昭和四十九年六月二十五日印刷
昭和四十九年七月一日発行
編集兼発行人 大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地 中島蓬太郎
印刷所 藤原童心社
郵便番号 542
発行所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地 川柳塔社
電話大阪・二七一―二九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です
大阪・なんば・日本橋・四条
東京・京都
高島屋

・ペンペン草・

★これを書いている頃、句集の校正で黄風、史好氏は大変である。とにかく七月号が出るのと同時に句集を届けてもらわないと安心できないからだ。

★路郎忌と川柳大会と、はじめての川柳塔同人による句集刊行とがドッとやってくる。

★川柳塔の〝顔〟が七月七日にほころぶか、どうかは同人諸氏のご協力待ちというところだが、さて、その顔のこと、先日秋田実先生に門下数名がまた夕食をご馳走になった。「不二田クンはますます精悍さが増してくるね」と帰りぎわに云われた。「人相がますます悪くなってくる」と受けとったことだが、年をとるとやさしくなるらしいのに―ぼくの場合はどうしたことなのか。由川阿茶女史だけは「そないに人相、悪いことないよ」と、いささか同情心をまぜて云ってくださるのだが……。

★『川柳雑誌』を読みかけたころ、阿倍野支部の句会へはじめて出席した。どんな風の吹きまわしか、五題中四題が天位、そのうちの合郷路人氏選では三句が三才独占。四天王寺境内のうす暗い茶室が会場だった。ぼくはせまい茶室の四隅の一角に陣取っていた。「あの人は誰や」とぼくのことをささやきあっていたらしいが、相手になるな、なんやウルサ型らしいぜ」と云った人がいたそうな。後日わかったことだが、ぼくの顔を見て「ウルサ型」と診断したのは菊沢小松園氏だった。阿倍野支部では須崎豆秋氏と小松園氏が指導者だった。「ズブ素人やないでしょうか」と訊かれたが一処女作が昭和六年で久良伎選で銅メタルを貰ったことはいわなかった。「阿倍野支部はむかしから大物が出るとこや」と豆秋さんは野介さんのように期待をかけたらしいが、ご覧のとおりのテイタラクである。

★路郎先生はヒマがあると机上の右隅においてある鏡で、じっとご自分の顔を見ておられた。男でも女でも鏡を見つめているポーズはあまり好きではないが、路郎先生ほどになると、どこへ行ってもカメラを向けられるので、一番よい顔を研究しておられたのかも知れない。そういえば先生のどの写真を見ても、口をやわらかく結んだ笑顔のが多い。〝このことは故後藤梅志さんもいっていた。いつもおんなじ顔だな、と。

★心斎橋筋の店で、冷めたいミルクを注文したのに冷えたビールを持ってきた。ぼくの顔を見てミルクをビールと判断したようだ。

（不二田一三夫）

▼葉子コーナー

▼川柳塔社創立の10月ころに入社して、10年間はアッというまに過ぎ、20代ともサヨナラです。

▼不二田様にはいろいろ勉強させていただきました。しかしいつまでも、「未完」のままです。高田好風先生の「驕るなよまるい月でも一夜だけ」は好きな言葉です。

Toray
EASY CARE／手のかからないせんい
東レテトロン®
レインコート
東レ株式会社

うまさをそのままお届けします
アサヒビール

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十九年六月二十五日　印刷
昭和四十九年七月一日　発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五六六号

川柳塔　七月号

定価　二百五十円（送料十六円）

お隣りさん！
サントリービール〈純生〉

南紀　和歌山　四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ　はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル　ホテルパシフィック
政府登録国際観光旅館　朝日

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館　中の島

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館　湯の峯荘

和歌山・新和歌浦——海岸美を楽しめる
政府登録国際観光旅館　萬波

徳島・鳴門——うずしおの宿
政府登録国際観光旅館　鳴門
政府登録国際観光旅館　鳴門公園ホテル

紀北・橋本——ゴルフの後で会席料理
観光旅館　紀の川苑

大阪・泉南淡輪——魚つりにゴルフに
観光旅館　淡の輪苑

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み■南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222

南海電鉄